岡松甕谷撰

初學文範

東京 金港堂書籍株式會社

序

距今七八年。西學大興。海內靡然從之。於是乎。欲廢漢字專用國語。倣西文體者有矣。欲仍用漢字限其數。以便乎習學者有矣。爭創異說。相與聚訟。而識者默然。不置辯於其間。蓋知空言無施。不久而自熄也。然是言一出。後進之士。不復用力於文辭。以致世之以俗文譯西籍者。率皆鹵莽滅裂。無能舉其要。於是。初知漢文之不可以

44. 2. 24
寄贈

岡松參太郎 寄贈

已。稍稍舍西籍而學焉。嚮之創異說者。亦密購謝氏軌範。沈氏讀本。以爲帳祕。欲一踔而造於能文之域。而初不知其不可襲取也。夫學文必有次序。初學先自記實始。循序而進焉。則可以庶幾也已。昔者。南豐帆足先生。教弟子必先授。以屬辭正譯法。使其優游涵泳。有得於心而應於手。則左右逢源。無施而不可。當時從游先生。成材者多。而吾友甕谷岡松君其最也。屬者。下

帷東都。仍先生遺訓。誘掖學者。而奧子紹。野中處平。皆嘗事先生。知君之善於屬辭也。彙其平生課諸生譯稗史者。名曰初學文範。以公于世。刻成。使余題一言。余常謂文猶碁。學碁者必據先哲碁經。以審其逕路。而後下子始有法。學文亦然。如斯書乃示其徑徑者也。且夫字猶碁子也。能者所用。其數不加多。但置之得宜。可以無敵於天下矣。顧斯編所用。不過數千字。亦非奇

僻難讀者。然裁緝之至。數十篇之多。千變萬化。莫不如意焉。嗚呼何其巧也。余願後生小子。從此法而學。學而熟焉。庶乎一洗方今文辭之陋。而譯書和文。亦至于辭達意明也夫。

丙子冬日　　海南客漁　啓　識

初學文範

題言五則

一頃者甕谷子撰一小册。述作文之方。予更爲彙其平生課諸生譯稗史者數十篇。分爲三卷。名曰初學文範。與小册子並行。以便學者取則撰材焉。譬如學劍。與其徒講法。不如觀之跳趨擊刺之間。有以獲於已。冀足盡其道矣。

一學豈止于文乎哉。然不學文。望其徧通群籍難矣。予少與甕谷子同事文簡先生。當時從先生學者甚衆。

先生令誦習史漢。旁取吾邦稗史。寫以漢文。其有紕繆。先生輒一筆勾之。令更作。如此者屢矣。必得乎正而後已。於是讀書與作文。互相進長。足爲成材之地。甕谷子教諸生。亦因先生遺訓。必先授以正譯法。但以後生少年。多不嫻於辭。每一篇成。甕谷子隨手改竄。後復屢經刪定。故每篇起草。雖出人人所爲。要不過甕谷子撰次。是以今不復著記者名姓。從簡也。

一學文莫善於記實。亦莫難於記實。學者苟有得於此。其作序記論說。未必至甚費力。甕谷子夙擅長於此技。方予事先生。每有難於措辭者。必從論定。所裨益甚多。迺如是編。非獨淘鍊字句。一洗和人口吻。其措辭必反覆乎原稿。譬之一匹錦。龍鳳花草之紋。表裏整然。初不爽絲毫。於是每篇寘原文於前。使讀者有考於記實正體焉。

一予已輯是編。更延野中處平同校。遂與連几諷誦。每遇會心處。急援筆題數語其上。或就行間批之圈之。夫嗜秦人之炙。無以異於嗜吾炙。況近獲之我同臭味。或有不免激賞浮實。亦情之所不能已也。

一近歲吾邦與唐朝鮮通好。琉球亦藩屬於我。自今而往。使命往來。與夫商旅之轉貨貿易。騷人韻士之觀

風問俗者。其假言以宣意。非獨我有資於彼。彼亦將有資於我。往觀西人取漢籍。行間註已辭。以便學漢音者。顧是書或傳播於異邦。異邦人將因漢文有以得於我辭。猶西人之爲。果然。非獨惠資於我後生小子而止。通東西之志。爲邦國之好。亦未必無少補也。

明治九年七月　　奥並繼識

本書初版。分爲三卷。今當再版。合爲一卷。且每篇附題目。以便省覽云。

明治四十四年二月　　大塚勝識

初學文範目次

一　東照宮大高城へ兵粮を入れ給し事……一
二　東照宮諫言を容れ給ひし事……六
三　柴田勝家水缸を破て城を守りし事……一〇
四　赤尾伊豆が事……一三
五　長尾輝虎越後を治められし事……一七
六　輝虎平家を語らせて聞れし事……二五
　　附佐野天德寺の事
七　堀直寄見切の事……三二
八　秀吉有岡城へ使者に行れし事……三四
九　水野勝成高名幷行狀の事……三七
一〇　東照宮の御軍略に依て蟹江城降參の事……四四

一一　本多重次强諫の事……四五
一二　井上正就駿府へ御使の事……四九
一三　小早川隆景遺訓の事……五四
一四　加藤光泰大言の事……五七
一五　石谷定清御供に參る事……五九
一六　辻小作中黑道隨が事……六二
一七　梶左馬助御書を認る事……六五
一八　山田勘六郎討死の事……六六
一九　福嶋家の士大將東照宮を拜する事……六九

以上常山紀談

二〇　池田家使宮城南部救尼崎城事……七〇
二一　眞田幸村與伊達正宗戰野村事……八一
二二　眞田安房守昌幸遺言之事……九三

二三　小笠原忠政之臣高田又兵衛武功之事……一〇一
二四　原田伊豫於肥前島原軍功之事……一〇二
二五　本多正信和君臣事……一一一
二六　安藤帶刀忠義篤厚之事……一一五
二七　福島左衛門大夫正則左遷之事……一一八
二八　藤堂高虎世々補先手事……一二五
二九　上野郡主重長之臣月岡左門忠義之事……一二九
三〇　毛利元就諫大內義隆事……一三六
三一　本多忠勝之二子互被讓黃金事……一三九
三二　寺澤志摩守廣高行跡之事……一四二
三三　寺澤廣高之臣池田市郎兵衛潔白之事……一四六
三四　板倉勝重之臣松平太郎作諫言之事……一五三
三五　源君食麥飯行儉約事……一五五

三六 源君病癰依本多重次之諫而愈事……一五六
三七 源君使斥候見敵地事……一五九
三八 内藤正成守濱松城事……一六一
三九 源君巡見大阪之攻口事……一六三
四〇 極暑疲馬不可飼水事……一六四
四一 源君使景勝援佐竹義宣事……一六五
四二 横田甚五郎之相圖物見之事……一六六
四三 可用斥候之功者事……一六八
四四 物見使番察將士之心不可言實事……一六九
四五 源君使渡邊圖書見加州之陣場事……一七〇
四六 伊達正宗使茂庭周防出物見事……一七一
四七 三人之武功其賞勝劣事……一七二
四八 源君進茶於秀吉事……一七七

四九 源君不飾慨事……一七九
五〇 堀久太郎秀政旅宿失火之事……一八一
五一 秀忠公教訓御近習之事……一八三
五二 觀世左近論謠之三病事……一八四
五三 寺尾作左衛門大力之事……一八五
五四 勝山左近大力之事……一八八
五五 正木大膳壯力之事……一八九
五六 千賀五助勇力之事……一九一
五七 遠山六兵衛投反橋事……一九三
五八 高木右馬介强力之事……一九五
五九 光顯寺之僧大力之事……一九七
六〇 惠林院義植卿正覺寺頽之事……二〇一
六一 大内介義興謀討細川政元等事……二〇六

初學文範目次 終

六二　伯々下部伯耆守女善祐尼事……二一二
六三　上野國藤藁阿部三太郎秀貞廉潔之事……二一八
六四　横瀬勘九郎宗繁勇力之事……二二三
六五　沼田平八郎景義射鹿事……二二六
以上武將感狀記

初學文範

岡松甕谷撰
友人　奥野中準　竝繼竝評
門人　關口隆正　大塚勝二郎　同校

一　東照宮大高城へ兵粮を入れ給ひし事

今河義元。尾張國大高の城に。鵜殿三郎長持を置れけり。織田信長も。所々に城をかまへ。丹家には水野帶刀。善照寺には佐久間左京。中島には梶川○○。鷲津には飯尾近江守宗定。又丸根には佐久間大學助盛重をおきて。其外

據下文寺部下當有梅坪二字蓋誤脫也

寺部擧母。廣瀨にも砦あり。大高に兵粮を入なば。鷲津丸根に貝を吹べし。寺部擧母廣瀨の砦より馳集り。丹家中島より後詰せよとぞ定られける。義元東照宮の御もとに使をもて大高に兵粮を運入させたまへとなり。東照宮心得候と仰て。やがて打たち給ふを。酒井石川等。信長の手あてゆゝしく候。中々大高に兵粮入ん事。思もよらずと申せども。聞し召し入られず。われに謀有とて。先兵をわかち。福釜の松平左馬助親俊。酒井與四郎忠親。石川與七郎等四千計。永祿二年四月九日の夜半に。大高鷲津丸根をわきになし。寺部の砦へおしよせよと下知し給ふ。東照宮は八百計の兵をひきゐ。兵粮米馬にとりつませ。大高の城二十町ばかりわきにひかへ給ひけり。先陣寺部におしよせ城中さわぐ處を。一の木戸口打破り火

をかけて。又梅坪におしよせ。三の丸まで攻入。火を放て燒たつる。其焰天をてらし。鬨の聲ひゞきわたりて聞へければ。丸根鷲津より是を見て。三河の敵はる〳〵とふみ越て攻入たるはいかさま故有と覺ゆるぞ。とく後詰せよとて。寺部梅坪にかけ向ふ。其間に東照宮麾をとらせ給ひ。米おほせたる馬千二百疋打つれて事なく大高に運入させ給ひけり。丸根鷲津に殘る者ども是を見れども。大かた後卷に出たれば。せんかたなし東照宮やがて軍兵をひきまとひ岡崎にかへらせ給ふ。人々今夜の謀略及ぶべきに非ずと申ければ。聞し召れ此甚しり易き手だてなり。先思もよらぬ寺部梅坪を攻て火をかけ。丸根鷲津の軍兵を後づめに出させ。ひきたがへて兵粮をはこび入たりしなり。兵法に神速を貴といひ。又其不

意に出るといへることありとのたまひければ。皆此殿臨濟寺の雪齋に。兵書をよみ習ひ給ひしかども。かゝる謀はよも出し。天性すぐれて。大將の道を得たまへるとぞ申ける。此十八の御歳の事なり。常山紀談下幷同。蓋原文用字或不能無差繆。今且仍舊不敢改定後皆倣之。

今川義元置砦於大高。使鵜殿長持守之。以逼織田右府。右府亦使水野帶刀守丹家。佐久間左京守善照寺。梶川守中島。飯尾宗定守鷲津。佐久間盛重守丸根。及寺部。梅坪。擧母。廣瀨。亦皆置戍焉。令駿河人納糧於大高。鷲津丸根吹螺爲號。寺部梅坪擧母廣瀨出兵逆戰。丹家中島援之。已而義元使使謂東照公曰。請爲我納

糧於大高。公許諾。酒井石川皆曰。尾人置砦繞大高。拒守甚嚴。君安得納糧。公曰。吾有一計。卿等勿以爲虞。夜分兵爲二。使松平親俊酒井忠親等。將四千人。急過鷲津丸根直襲寺部。奪門縱火。轉攻梅坪。又入其郛。火之。鷲津丸根兵望見驚曰。敵背我二壘。敢深入。得無非有他奇策乎。何不速援之。遂悉兵赴戰。公豫將輕兵八百。馱糧於馬者。千有二百疋。距大高半里而止。乘間疾馳至大高。盡輸糧城中。鷲津丸根已空壁出。留守者見之。無能拒也。公已還。諸將皆曰。君之爲謀。非臣等所能及也。公曰。此非難知也。我遣兵急攻寺部梅坪。以誘敵兵

出戰。因得以納糧耳。兵法不云乎。兵貴神速。又曰。出其不意。此吾所取法也。諸將皆悅服。私相謂曰。我公嘗從臨齊寺雪齋受兵書。顧安得有此策。公豈非生而具良將之略乎。公是擧蓋爲永祿二年四月九日夜半事。時公年十八云。

二　東照宮諫言を容れ給ひし事

東照宮濱松におはしませし比。ある夜本多正信御前に有しに誰人にてかありけん。姓名を懷より書を取出し。諫奉るべしと。兼てより存る事の候て書候もの也と申せば。大によろこばせ給ひ。夫よめと仰有ければ。披きてよみけるに。一條よみ終る度毎にうなづかせ給ひ。尤なりと仰せられ。よみ終りければ。汝が志感ずるに詞なし。これより後も心置なく告よ。返すがへすも神妙なりと。くり返し仰ければ。忝きよし申て退出す。正信居殘りて。只今諫め申せし事。用ふべき事に候はずと申す。東照宮大にけしきかはらせ給ひ。いやとよ己が過はしらずして過るもの也。國を領し人を治る身には。過を告知せ諫る者は鮮くて。唯諂ひて。主君のいふ事道にたがひても。さは候はじと詞を返す人はなきぞかし。諫をふせぎし人の國をうしなひ身を亡し。後世の笑ひ草となりしためし多し。只今われを諫し者。日頃心を盡し。見及ぶ樣に付。諫んと思ひて書しるし。時もあらば見せんと。思ひ居たりし志。何にたとへんやうなし。其用ふべきと。用ふべからぬとにはよらざる也。唯彼が忠臣を愛する也とぞ仰

ける。また或夜の御物語に。凡主君を諫る者の志。軍に先がけするよりも大に踰まされり。其故は。戰に臨みて。一番に進み出るは。素より身をすてゝの事なれども。必しも討死せず。又討れたりとても。後の世に名を殘し。死後のほまれとなるぞかし。幸に功名をとぐれば。恩賞にて家富子孫榮る也。されば得有て失なき忠なり。諫は然らず。主君不道にて善をにくむに。ずゝみ出で直言する者。十に九つは刑罰にあひ。妻子をほろぼし果る樣に成行ぞかし。失ありて得なき忠なり。武功は名利の爲にもなるべし。諫言は聊も身の爲をおもふ心あらば。いかで主君の前にて直言すべき。唯人に君たるものゝ賞すべきは。諫臣なりとぞ。仰ありける。

東照公在濱松。本多正信夜侍燕語。有一人入見。取書

如見東照公恂々懇諭之狀

於懷。以進曰。小臣久欲有所報聞。謹載之書。幸得賜觀覽。公悅令卽席讀之。每終一條。莫不首肯稱善。已畢。公曰。寡人深嘉卿忠義。後復有所見。速告我。勿隱爲也。慰諭甚至。其人稽首謝恩而去。正信曰。彼所謂略無足取者。君何賜感賞之深也。公不悅曰。否。凡人自知過者鮮矣。況有國有家者。群臣先意承色。唯其言之無違。能犯顏强諫者。未之有也。且自古剛愎悖諫。以亡家國。爲世僇笑者。何限。今彼則居常記載。欲得間以規我。其設心豈非忠乎。吾取其愛我而已。寧復遑問其言有取與否哉。又嘗語左右曰。爲人臣。能犯顏强諫。踰於臨陣先登

遠矣。何則挺身先登。幸建殊功。褒寵疊至。進爵益邑。遺澤施後嗣。縱死猶不失當世顯名。若夫諫者則不然。其君方違道縱欲而敢直言不忌。必干威怒。身死妻子爲戮者。十常居八九。故先登陷陣。好名好利者。猶或爲之。至於進諫。非愛身私妻子者所能爲也。故人主豈得不貴忠諫之士乎。

三　柴田勝家水缸を破て城を守りし事

永祿十二年。佐々木承禎。柴田勝家が守る所の長光寺の城をかこみて攻る。遂に惣がまへを打破る。勝家本丸に在て。爰を專途と防戰ふ。鄕民佐々木が陣にゆきて。此城は水の手遠く。遙なる所より水をとり候。それをとり切る程ならば。城は保つべからずと。告しらせければ。承禎悅て。水の手をとり切りたり。城中是に困めども。よはれる色をあらはさず。承禎これを見ん爲に。和平せんとて。平井甚介を使にして。城中に入たり。平井勝家に對面し。手水を請ふ。缸に水みちたるを。小姓兩人してかき出たるに。平井手を洗ければ。小姓殘れる水を庭にすてたり。平井歸てかくといへば。事のたがひたる故に。あやしみあへり。かくて城中既に水竭ければ。勝家明日は討て出。切死にせんとて。諸士をあつめ最期の酒宴す。殘れる水を問へば。二斛計入べき缸をかき出す。さらば此間の渴をやめよとて。人々汲のみてけれは。勝家眉尖刀の石づきにて。缸を碎きたり。夜明方に門を開打て出る。佐々木思ひもよらざれば。大に敗北しければ。勝家首八百餘級。

を得て。岐阜に獻す。勝家は猶長光寺にあり。信長感狀を。あたへ賞せらるゝ事大方ならず。是より勝家を缸わり柴田と世に稱しけり。

柴田勝家守長光寺城。佐々木承禎攻之。入其郛。勝家退保于牙城。村民或謂承禎。城中無水。常取之于外。君若絶其汲道。豈得復保城乎。從之。居數日。略無困病狀。承禎佯使其臣平井甚介行成。因欲以察虛實。平井入城見勝家。請盥。勝家使盛水於甕。二侍臣舁以出。已盥。覆餘于庭。平井還具以狀告。衆皆異之。已而城中水竭。勝家夜屬其衆。謂曰。明旦與卿等。力戰而死。遂置酒高會。問猶有餘水否。左右舁一大甕至。貯水可二斛。勝家曰。卿等何不飽飲以解渴。衆已飲。勝家卽取眉尖刀。以錞撞破甕。天明開門突戰。承禎兵出不意。皆驚潰。勝家乘勝。斬首八百餘級。使使獻捷岐阜。織田右府。賜書褒賞甚至。時人因號勝家。曰破甕柴田。

四　赤尾伊豆が事

信長江州小谷の城を攻。淺井長政勢盡て。既に自害せんとする時。不破河内を以て。緣者のよしみ。降參あらば疎意あらじと云はせらるゝに。長政降參すべき志に非るを。近習の士ども。よも別の子細も候まじ。城を出て運を開かれ候へといふ。さらば父下野守も。共に疎意なくは。降參せんとて城を出るを。信長見て。長政何の面目有て。

今更の降參ぞと。高聲に呼はらせられしかば。長政忿て。赤尾美作が宅に入て。自殺せり。淺井石見。赤尾美作いざ切死せんとて。かけ入けるを。多兵押隔て。生取て信長の前に出す。信長汝等長政をすゝめ。朝倉にくみして。吾を敵となす。なれる果を見よと。罵らるゝに。淺井居直り。事新しき事を承候もの哉。義景を別事なく立置んとの誓文。其血もいまだかはかざるに。越前に軍を出し。是によりて。長政義の當る處にて。義景に與したり。今日城を出よ。疎意あらじと。いつはりたる詞を押はかり。只自害と一すぢに。決したりしに。若天運によりて。家を立るならば。信長を斯のごとく。からめんと思しに。かく成たり。義を知ず耻を知らざるは。信長こそ人面獸心なれといへば。信長彌怒て汝詞にも似ず。生どられたるはいかにと。

罵らるゝに。年老ぬれば力に及はず。昔より士の生捕となる事。耻にあらず。武勇を以て敵を討得ずいつはりたばかりて。人の國を亡すこそ耻なれ。見られよ必下人に首を切らるべしと罵り返せば。信長杖を以て打れしに。石見打笑ひ。からめたる者にかゝるはからひ。あつぱれよき大將の禮儀かな。いかほどもうてや犬坊と罵りけるが。石見も美作も終に殺されけり。

織田右府圍淺井長政於小谷。長政力竭將自殺。右府使不破河内謂之曰。君若忝見臨。寡人亦以姻戚之故。不敢有違忤也。於是左右交勸長政曰。右府亦非必有他意。不如且降以爲後圖。長政曰。大人亦得無虞吾獨

盡出一個鐵漢

不能忍詬出降乎。乃請降。右府望見長政出城。颺言曰。卿何面目乃出降也。長政聞之怒。遂自盡於赤尾美作家。美作與淺井石見怒曰。寧力鬪而死。直進犯陣。衆擁見右府。右府罵曰。汝等勸長政與越合從以敵我。今果如何。石見正色曰。君何出此言。君嘗與越約。無有相害。瀝血以盟。曾未及乾。乃遽加兵於越。寡君世爲越與國。豈得不仗義趨急。出死力以相救乎。今君又誘寡君出降。臣固知君非善意。欲退就死。特以天或祚寡君得保宗社。他日興兵復與君遇於中原。必得以今之見困辱者待君。不幸力不足。遂至于此。夫棄義忘恥。蓄虎狼之心。寧有若於君者乎。右府怒曰。汝言如此。廼爲囚虜。何也。石見曰。臣老羸。不免爲兵衆所制。然自古士之就縛執者多矣。非所以爲恥也。至於不能鬪勇。徒權譎詭詐。以亡人家國。豈非恥之大者乎。臣固知君一旦勢窮。授首于奴隸也。右府益怒。以杖擊之。石見笑曰。狗兒狗兒。任汝撻之。夫已就執縛。而撻之。爲將之禮。固如此乎。狗兒蓋取於歌謠詞。以譏右府。遂與美作皆遇害。

五　長尾輝虎越後を治められし事

長尾輝虎の幼名を猿松と申す

輝虎始は景虎といふ。後京に上られし時。公方より輝

の字を賜て。輝虎と稱す。鎭守府將軍良兼四代の孫。左衞門尉致經二男。村岡五郎忠通が末にて。其後長尾と稱す。後管領上杉の讓を得て。上杉と稱す。甲陽軍鑑に。梶原景時が末孫といへるは誤也。

兄を三郎といふ。猿松あら者にて。父爲景の心にそむく。是繼母の讒言故とぞ聞へし。かくて出家にせよとて。下越後の椽原淨安寺に追やられけり。金津新兵衞供して。米山越にかゝる時。猿松八歳なれば。かちの士背にかき負て山を登り。嶺なる堂におり居て。破籠(ワリゴ)やうのもの。とり出しまゐらせけり。猿松遙に頸城府内を眺やりやゝうち涙ぐみて。我かくおちぶるゝ事こそくちをしけれ。やがて軍をおこして。志をとぐるならば。此山によぢ登り。府内を目の下に見おろすべし。しかるべき軍の地なりと。いはれしかば。乳母子なる本條美作守も。舌をふるひ。其詞なわすれたまひぞと悅びけり。

一說に。爲景猿松を憎みて。其傅城越前守にあづけらる。此時十二歳。それより諸國をめぐりて。風俗を見人情を察し。地の利を窺ふといへり。

かくて。猿松九年の間寺にあれども。僧になるべき志なし。天文十四年。爲景越中にて討死あり。嫡子三郎暗弱にて。越後亂れ。所々を敵に掠奪れたりしかば。父の弔軍せんと思ひ立。宇佐美駿河守定行をかたらひ。天文十六年正月。十八歳にて元服し。平三景虎と名のり。椽尾(ツルヲ)の城に旗をあげられたり。三郎是を聞。長尾越前守政景に。七千の兵をそへて。攻うたしむ。景虎矢倉にありて。敵は今夜引かへすべき物色ありと。いはれけるを定行聞て。はる

〳〵と攻來り。空しく退くべきやといふ。景虎敵に小荷駄なし。久しく圍むべき計にあらず。ひき退ん處を擊ば。勝こと疑なしと。いはれければ。定行も然るべしとて。夜半に打て出る。果して政景の軍みだれたちて敗北しけり。三郎又打向ふ。景虎柿崎の下濱に陣をとり。やがて三郎を打やぶる。三郎府内をさして引退く時。景虎米山の東坂本にて。我ねむり氣ざしたり。休て後追うたばやと。て。小家に入る。定行あるべくもなし。とく追討ならば破竹の勢とは。是なるべしと。いへども。高いびきかきて。眠られしかば。皆かゝる時を。失ふ事よとなげきあへり。やゝ有て。景虎つと起あがり。三郎の軍兵。山を三分の一あなたに越たりと覺ゆ。いざ追討やとて。馬にのり螺の貝吹たてさせ。龜破坂よりおとしかけ。大に打勝れけり。定行けふ北るを擊べき時そら眠せられしは。山を追上らんに。敵をかさにうけなば利有べからず。敵下り坂にな

りて。引立たるをうたんとの事なり。是老臣等が及ぶべきにあらず。ことしはわづか十八歳。弓箭をとる事誰やの人か肩をならべなんとぞ。かたりける。景虎越後を治め得て。高野山に出奔せんとす。長尾家の長臣相集り。景虎なくば。國を敵に奪るべし。いざとて。關の山におひ行て。さま〳〵にとゞめければ。景虎のいはく。我年わかく。威重からず。老臣等我を輕せば。國の根本立ず。此國人の爲に利を求るは。我身の害をまねくなり。是より後。吾命を背くまじとならば。神文を書て得させよ。さらずば。とゞまらじと。いはれけるに。もとより。君と仰ぎ奉るべきなり。いかで命を叛き申べきと申ければ。さらばとて立

歸り。三郎を隱居させ。是より威をふるひ。越中に攻入て。父の弔軍とげられけり。長臣の中に二心ある者を。林泉寺といふ處にて腹切せて。國を治められけり。晩年謙信と稱しぬ。

一直瀉下略無著力處惟不見一點和人口氣亦不足貴乎

上杉謙信。其先出鎭守府將軍良兼。良兼四世孫致經第二子曰忠通。其後世爲長尾氏。傳至謙信屬管領上杉氏之衰。命冒其姓。遂以上杉爲族。謙信幼有異資。父爲景惑於後妻言。惡之。令入橡原淨安寺爲僧。生八年矣。金津新兵衞送之。士負攀米山。已至巔。就小祠憩。發厨進食。於是。爲景邑於頸城。謙信俯瞰城郭。潛然出涕曰。吾流落至此。爲憾多矣。他日興兵據此山。得以濟我事。此豈非便地乎。本條美作守爲謙信乳母子。亦從曰。郎君願勿忘斯言。謙信在寺九年。猶無意披剃。已而爲景戰死於中越。長子三郎承後。昏懦失於撫御。舉國大亂。境土日蹙。謙信密與宇佐美定行謀。欲唱義爲父復讐。天文十六年。謙信年十八。正月擧兵於橡尾。三郎聞之。使長尾政景將七千人來擊。謙信從城樓望見曰。政景今夜必引歸。定行曰。彼遠出兵。今方至矣。何遽退爲。謙信曰。否。軍無輜重。非持久者。若候其且引去擊之。敗之必矣。定行曰。然。夜半開門出戰。政景大敗走歸。三郎復來攻。謙信進軍於柿崎。復擊敗三郎兵。追至米山東

經畫略定卽遁去與戰酣鼾睡皆洞悉後當如此姑爲權話以籠

麓曰。吾欲睡。且一覺而後戰。定行曰。君安得如此。今乘勝急追。所謂破竹之勢也。謙信不聽。遂引枕鼾睡。衆皆以不亟追爲恨。少頃謙信醒。曰。度我兄已踰嶺。急追之可也。卽起上馬。吹螺爲號。督兵以進。自龜破坂馳下。復大敗之。定行歎曰。敵方攀山。故且就睡待其踰嶺。而後追擊敗之。我君今年十八而已。卽善戰如此。天下誰復爭衡者。非吾儕所及也。謙信已討定四境。將遁於高野山。越諸臣議曰。公子不在。國且爲敵割裂。追至關山。固請留保國。謙信曰。吾年少無威權。諸大夫必至蔑我。如是。根本不立。何以經國。諸大夫所以爲國。秖禍我耳。若欲必要我。何不納載書以明無我違。否吾不能復從大夫之命也。皆曰。群臣願奉君。復何貳之爲。遂與俱歸。奉三郎就老於別館。謙信蒞國。於是。將兵入中越。擊與父有仇者。盡滅之。已歸。命大臣懷貳者。皆賜死於林泉寺。謙信小字猿松。將擧兵。初冠名景虎。後入京。謁將軍光源公。賜偏諱改輝虎。晚削髮。遂以假號行。

畧人心抑亦所以徵取威定基之速前後寫得亦極透徹

六　輝虎平家を語らせて聞れし事

附　佐野天德寺の事

輝虎ある夜。石坂檢校に平家をかたらせて聞れけるに。鵺の段を聞て。しきりに落涙せられけり。かたへの者どもあやしみ思ひけれは。輝虎のいはく。吾國の武德も衰

へたりとおぼゆる也。昔鳥羽院の御時。禁中に妖怪ありしに。八幡太郎鳴弦して。鎭守府將軍源義家と名のりければ。妖怪消ぬといへり。其後頼政鵺を射たれども。猶死ずして。井野隼人さし殺して。とゝめたりと聞ゆ。義家鳴弦せしは天仁元年の事なり。鵺の出しは近衞院仁平三年なれば。僅に四十六年なるに。武德既におとれる事はるかなり。今又た頼政におくるゝ事四百五十年。われ又頼政におとる事遠かるべければ。おぼえず。涙の流るゝよとぞ語られける。又相似たる物語あり附記す。相州北條の幕下。佐野城主天德寺。勇將なりしに。ある時琵琶法師に。平家を語らせて聞けるに。いまた語らぬ先に。われは唯あはれなることを聞度ごそあれ。其心得せよといひしに。法師承候とて。佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出たりしに。天德寺雨雫と涙をながして。泣たりけり。

さて又今一曲前のごとくあはれなる事を聞たしといへば。那須與一が扇の的をかたる。半に及て。天德寺また落涙數行に及べり。後日に側に仕へし者どもに。過にし日の平家はいかゞ聞つるといふに。皆面白き事に覺へ候。但し一つ心得ぬ事こそ候へ。二曲ともに勇氣功名なることにて。あはれなるかたすこしも候はぬに。君には御感涙にむせばせられ候。今に不審なることゝ。申あひ候といへば。天德寺驚きて。只今迄は各を頼母しく思ひ候ひしが。今の一言にて。力を落したるぞとよ。先佐々木が事をよく心にうかべて見られ候へ。右大將舍弟の蒲冠者にも賜はらず。寵臣の梶原にも賜はらぬ生嗟を。高綱に賜はるにあらすや。其甲斐もなく。此馬にて宇治川

の先陣せずして。人に先をこされなば。必討死してふたゝび歸るましき暇乞して出ける。其志あはれならぬ事はとて。しは〳〵涙をのごひつゝ。しばしありていひけるは。又那須與一も。人多き中より選ばれて。只一騎陣頭に出しより。馬を海中に乘入て。的にむかふに至るまで。源平兩家鳴をしづめて是を見物す。もし射損しなば。味方の名折たるべし。馬上にて腹かき切て。海に入んと思ひ定めたる志を。察して見られよ。弓箭とる道ほど。あはれなるものあらし。われは毎も戰場に臨ては。高綱宗高が心にて鎗を取候ゆゑ。右の平家を聞時も。兩人の心を思ひやり。落涙にたへざりし。然るに各はあはれになかりしとや。思ふに各の武邊は。只一旦の勇氣にまかせて。眞實より出るにてはなきにやと思はれ候。夫にては賴母しからずとなげきけるとぞ。

上杉謙信。夜命石坂檢校歌古曲。至源賴政射鵺。歔欷不自勝。左右異之。謙信曰。嗚呼古今威武之不相及。一至于此也。昔者鳥羽帝時。宮中夜有妖。源義家暗中鳴弦。自稱職官名姓。妖卽止。至於賴政射鵺。一發猶不能獲。其臣井野隼人捕而殺之云。夫義家事在天仁元年。而賴政射鵺爲仁平三年。相距特四十六年耳。而賴政之遜於義家。固已如此。今也距賴政。纔四百五十年。我亦不及賴政遠甚。思威武之益下於往昔。是亦不足哀乎。先是北條氏盛時其將天德寺守佐野城。以勇聞。亦

彈琵琶和云々原文所無然得數句前後始覺精彩則要不可無此添補也

乍聞侍者言絕不與已意相入不覺哭一段情狀躍然紙上

嘗召瞽者歌古曲。曰。卿爲我擇悲壯慷慨足泣人者歌之。瞽者曰。諾。爲歌佐々木高綱先登涉宇治河彈琵琶和之。且彈且歌。俯仰嗚咽。天德寺聽之感傷。泣涕雨下。已畢。更命歌一曲。瞽者又歌那須宗高射扇。且半天德寺亦悲泣。幾乎不能終曲。他日問侍者曰。卿等往聽歌古曲。意以爲如何。皆曰。樂甚。抑往所歌。皆壯士赴戰。意氣豪儁。自雄於一世。復何所哀。而君獨若不免悲懷者。臣等至今異之。敢問何故。天德寺驚曰。初吾以卿等足與有爲。今聞卿等言。我深有慊焉。且卿等獨不思高綱赴戰之勤乎。夫生唉者天下之良馬也。源右將弟範賴。

如聞天德寺嗚咽涕泣之聲

勇士赴戰孰不以死自分者但荅々乎高綱等或殊遇致身鋒鏑

與其所最愛幸梶原景時請之。皆不與。特以賜高綱。高綱已獲此良馬。若不能先衆涉河。遷延出於他人下。復何面目歸見右將乎。彼其臨發拜辭。固已決死必矣。吾每一思之。豈得不惕然于懷乎。語未畢。涕泗交頤。少焉又曰。那須宗高亦何異于此。夫源廷尉拔宗高於衆中。命以射扇。於是攬轡出自陣頭。入於海。是時也。兩軍數萬。皆罷戰觀之。宗高意蓋以爲若不能射扇。非特爲吾之恥。施及我三軍。果然。獨有馬上刲腹以投於海而已。吾亦思其蚤自決死。人固無哀於厠身戎行者。吾每臨陣執槍。未嘗不思高綱宗高之勤於赴戰。以自奮勵。故

是天德寺之言所以千載動人

聽瞽者歌之不復覺涕之隕于襟也卿等是之不思聽歌曲猶恝然若不與已相關者顧卿等能效力軍前者特血氣之勇初非有得之於心也如此吾亦獨得無慊于心乎悵然久之

七　堀直寄見切の事

大坂夏の軍に水野日向守勝成に。大和口先陣の大將を命ぜらる。堀丹後守直寄。松倉豐後守重政大和口に向ふ。五月五日夜ふけて。勝成敵よせ來ると見へて。松明多く見ゆ。懈るへからさるよしを。諸將にいひ遣はす。丹後守聞て。日向守は物になれたると聞しに。功者ともおもはれす。寄來る敵。何ぞ松明を多くともさんや。敵にはあらじといふ處に。日向守又使を以て。松明みな消たり。敵にはあらじと。告知せたれば丹後守さては敵なり。何ごゝろもなくて。火をともしつれたるが。功者ありて。消させたるならんと。いはれしが。果して後藤又兵衛なりけり。

簡潔之極實之彼邦人屬辭中豈得遽辨識

大坂之役。水野勝成爲大和口先鋒。堀直寄松倉重政屬焉。五月五日。夜深見炬火燭天。勝成虞城兵來襲。令諸將急爲之備。直寄曰。敵兵來襲。何多携炬爲。吾嘗聞日州善於應敵。殊不然也。有頃。炬火不復見。勝成又令曰。前者誤耳。非敵也。直寄曰。是敵軍有習兵者。知携炬非謀。遽滅之耳。宜急爲備。已而城兵大至。果後藤基次也。

八　秀吉有岡城へ使者に行れし事

秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城に來る。村重が士河原林越後守治冬。猿めがつらたましひ。遂にはあだをなすべし。今刺殺ん事易からんと。村重にさゝやきけれとも。村重聞入ず。此事を秀吉に語りければ。秀吉治冬を呼出して。懇に詞をかけ。さしたる脇指を拔て。引出物にぞしたりける。村重指替の、なくてといへば。秀吉吾刀一つを賴みて。信長に奉公する者に非ずといはれけり。後秀吉世を平げて。治冬を深く惡み。さがし出して。殺されけるに。治冬君の爲に其仇を除くは。武士の常の事なり。秀吉舊き怨を忘れず。無道なりといひて死したりけり。

豐公爲織田右府。使於荒木村重。村重臣河原林治冬。附耳語曰。沐猴。終將不利於君。今刺之非難也。村重不聽。遂止。已而以狀告。公乃召治冬。慰諭甚至。釋副刀賜之。村重曰。君有別具刀乎。公對曰。僕豈賴一刀之利者哉。然公深銜治冬。及天下已定。求而誅之。治冬曰。爲君除惡。武之職也。今乃不能忘舊怨。橫害忠良。豈爲得道乎。遂死。

野史氏曰。昔者韓安國以梁中大夫。坐法抵罪。蒙獄吏田甲辱之。及起爲內史。卒善遇之。而李廣之失官家居。夜出從人田間飲。還至霸陵。霸陵尉醉呵止廣宿亭下。已而廣又拜右北平太守。卽請尉與俱。至軍

錯綜而成勢如常山之蛇

斬之君子以爲安國之於田甲猶韓淮陰之於屠中少年其寛厚固足貴獨廣則狹中區區不能釋憾於一尉因深爲廣惜之余亦嘗觀豐太閤之爲人豁如大度頗類漢高帝而雄才大略遠出其右尚詎淮陰安國廣輩之問哉獨怪太閤之於治冬不免與廣同其失非獨不能如高帝赦季布比之淮陰安國其不相及亦遠矣且也治冬之所以取怨於太閤者要爲其主亦猶季布之於高帝固非田甲及屠中少年霸陵尉一時出乎戲謔者比夫高帝固勿論也廼至淮陰安國猶卓卓如彼獨太閤則不能容一治冬亦不

豐太閤盛動大烈照映千古而史氏則吹求至此其意實爲大閤惜非貶大閤抑亦忠厚之至也

知其何故也論者或以廣不候歸罪於殺尉余以爲太閤一傳乃至絶祀亦安知非横害忠良之禍哉

九　水野勝成高名 幷 行狀の事

長久手の軍に水野忠重の嫡子勝成は目を病て胄を著す鉢卷じたりけるを父見て汝が胄は ゆはり壺にしたるかと罵られしかば父ながら餘りの詞かな眞先かけて首を取か吾首を敵にとらるゝか二つの中よといふまゝに馬引寄て打乘もろ鎧をあてゝかけ出す忠重あれはいかにとて太田重助といふ士をして呼歸されけれども耳にも聞入す又水野喜右衛門はせ來り引とめんとするを勝成はたと睨て疊の上の諫は聞も入べし只今大軍の中にかけ入功名せん

時止れとて。引返す樣や有といひすてゝ。秀次の將。白井備後守が陣に突てかゝり。冑首をとりてはせ歸る。此日の一番首なり。勝成あら者にて。人を物ともせず。忠重の心に忤ひ。虛無僧となりて。國々をめぐりて。武者修行す。後に忠重死して。東照宮勝成に三州苅谷を賜はり。日向守と稱して。大坂の時。大和口の先陣として。大功有し人なり。勝成十萬石を賜ひて後。愈士に下り。身をいやしくしてすべて士に貴賤はなきもの也。主君となり。從者となり。互に賴みあひてこそ。世はたつ習ひなれ。されば大事の時は。身をすてゝ忠義をなすことぞかし。汝等我をば親と思はれよ。我汝たちを子と思はんと。常に士にいはれけり。年老て鷹野に出る時。行步かなはず。蒲團にのりて。士にかゝれ。士番所

にては。ふとん共に下に居て。年寄ての鷹狩おかしかるべし。鳥とらん爲にあらず。心ありての事なりと。度々いひて打過られけり。或時鷹狩の野にて。昔勝成に仕へし士を見かけ。いかになつかしや。我方にて祿三百石なりしに。立去て越前にて千石の祿と聞。今爰に來られしはいかにと問に。彼士仰の通。祿は越前にて增候へども。殿の下をいたはり。懇にもてなし給ふなじみ。祿には換がたく。暇乞うて歸り候ひぬと申せば。勝成大に悅び。折にふれ思ひ出せしなりとて。卽日に祿を增與へられけり。その後勝成隱居して。又鷹狩の時。彼士の家の門閉たるを見て。いかにと問るゝに。美作守の心に背く事有て。暇を乞走りぬと答へしかば。彼者は越前の祿千石を捨て小祿の我家をしたひて。

歸りし者なるに。いかに作州は思へるにや。かくいふ勝成は。若き時心得過て。武藏の金川。根笹流の弟子となり。尺八一本携へて。虛無僧となりて。日本國をめぐり。或時は堂塔に夜を明し。或時は野にも山にも日を暮し。樣々に艱難にあひ。人にも誹られしが。一言虛妄をいふ事なく。不仁のふるまひせざりし故にや。今福山十萬石を賜りぬ。然れども下の情をしることは。これ虛無僧たりし故なり。返す〳〵も惜むべき士を失ひぬるよ。美作は下の事はしられぬぞかし。すべてよき士は。主君又は頭の下知をも。無理なる事は心服せずたとへ少しの過ありとも。能士は二度も三度も知らぬ體して。猶已がたくば。傍輩に諫させんものを。美作の政事なげかしきぞとて泣れけるとかや。

水野侯少壯勇決與夫經涉艱阻衰老潦倒思往傷今欷歔惻怛之情皆極力摸寫前後相照映莫不筆々精熟此吾兄尤擅長處

長久手之役。水野忠重長子勝成有目疾。帕首而不冑。忠重見之。罵曰。汝得無非以冑爲溺器乎。勝成艴然曰。君何爲此言。臣止有先登獲敵。否爲敵所馘耳。遽上馬馳去。忠重令大田重助止之。不聽。水野喜右亦至。固止之。勝成叱曰。平時閑語。或有聽卿。今將馳敵軍建殊功。復何用卿爲。遂單騎冒關白秀次將白井備後守陣。獲甲首一。是日首功無有先於勝成者。勝成性兇猛傲物。爲父所逐。出遊四方。及父卒。東照公召封之苅屋。號曰向守。從攻大坂。爲大和口先鋒。有功。勝成已受封。折節下士。常謂群臣曰。士豈有貴賤哉。約爲君臣。要在相輔

而濟。故履危死綏。以效忠貞之節。亦以此也。吾視卿等猶子。卿等豈得不視我猶父乎。好出郊放鷹。年老弱行。猶坐大褥。令數人舁之過郊門。輒令置褥於地。謂士人守望者曰。老羸行獵。卿等得無以爲俳笑乎。然吾意非特欲獲禽也。如此者屢矣。嘗在郊。遇其故臣。曰。卿往事於我。食祿特三百石而已。聞近者委質越藩。益至千石。我思卿未嘗忘干懷。不知卿復何以至此也。對曰。臣在越叨糜廩祿。有倍於舊。特以君嘗愛恤群臣。恩意隆洽。臣實牽戀舊德。勿復以祿仕爲。遂致仕而去。願得自效於左右。勝成大喜。卽日命益祿。復爲臣如初。及勝成告老。讓國嗣子作州。又出郊過其家。見門墻牢鎖。問之。曰頃失新君旨。棄祿而去。勝成嘆曰。彼棄千石之俸。復來歸於我。今又不知其所之。吾兒秉心果何如也。且吾少獲罪先君。往武州金川。從根笹氏學洞簫。遂爲僧。巡遊天下。行乞自給。備嘗艱難。至露臥山野。以過夜。屢爲人所誹毀。然吾之於物。未嘗虛妄相欺。汰虐相凌。於是乎猥天寵靈。得受封大邑。顧我之能知下情者。以爲僧漫游也。今孺子以纖介之故。遽失良士。坐不知下情耳。夫士之良者。待之或不得道。其心不服。故有過。吾則陽爲不知。以竢其自悔改。如此三數。猶弗悛。使所親微規之。

人主待士當以此爲法孺子廼如此豈可勝嘆哉意甚悵恨至流涕云。

一〇　東照宮の御軍略に依て蟹江城降參の事

東照宮長久手の軍に勝せ給ひ勢州蟹江の城前田與十郎を御攻あらんとて打向はせ給ふ所に加勢多く馳入けるを御覽じて敵いかほとも城中へ入よと仰られしを酒井左衞門尉忠次承て何とて押留給はぬぞやと申す東照宮いかゞ思ふぞと御尋ありしかば忠次城は堅固なり多勢こもりなば爭か攻落すべき いかなる御心か候と申すを聞召大將謀を云やうや有と仰られけるが其後援兵の乘來りける船を追拂はせ糧道を絶せ給へば糧忽乏しく成て城を渡し降參しけり東照宮四十二歳の御時なりとかや

長久手之役東照公已敗走西軍更引兵攻前田與十郎蟹江於是入援者甚衆公曰無禦使敵得多入城可也酒井忠次曰君何不禦西軍公曰卿以爲如何曰城已固若衆入保安得急拔之臣不知君謀何出也公曰爲將豈得輕以謀告人乎初援兵皆乘船而至公遣兵擊盡走之因絶其糧道頃之城中食竭皆出降公年四十二時事也

一一　本多重次强諫の事

天正十三年三月。東照宮濱松の城にて。疔を病せ給ひ。近習の若き人に。膿を強く押させ給ひしにより。痛み甚しくすでに事切させ給ふと。城下には申ける程の事なりけり。今はかうとや思召けん。御遺言を仰出されしに。本多作左衛門重次參りて。先年臣を療養せし糟谷政利入道長閑が藥を付させられよと申けれども。聞し召入させ給はさりしかは。作左衛門大に怒り。殿は徒に死し給はんよ。此作左衛門は年老ぬれは只今自害して待奉るへしとて。坐を立けるを御覽じて。いかに作左衛門氣狂ひたるか。未ながらへたるに。自害とは何事ぞ。吾なから ん後こそ。大事なれと。仰られし時。作左衛門夫は人によりての事に候。若き時より幾度となき軍場に。數ケ所の手を負。世の中の畸（カタハ）といふ畸は。身一人にからげ候ひぬ。

今日まて殿の御情（ナサケ）にて。人がましくも候也。只今殿過きさせ候ひなは北條を始として。敵國より攻來らんに。殿におくれ奉り。はか〳〵しく軍する者や候べき。國は忽滅亡すべし。其時作左衛門は路の邊に餓死せん。ながらへたらば。あれこそ德川家に奉公せし。本多作左衛門よ。何を頼みにながらへたるなど。人に嘲り笑はるべし。近き頃武田の内にて。甘利殿とて。人の敬ひたる人も。武田の運盡ぬれば。今は本多平八郎が組となり。かゞまり居るを。見るも哀なり。是は人の上ならず。勝頼の不道にて滅したるも。殿の藥をきらひ給ふも。同し理に候と申せば。東照宮尤也とて。長閑を召。頓て藥を奉り。灸を大にして。作左衛門する〻奉りければ。夫より痛みやゝ輕くならせ候ひければ。作左衛門聲を上泣て。悅びしとぞ。

此篇諸書所載互有異同賴氏外史亦似據此書稍爲刪減者至屬辭巧拙覽者自知之

天正十三年三月。東照公在濱松。患疔。使左右按取膿。於是。腫痛益劇。公自以不救。召群臣。屬以後事。本多重次曰。往年糟谷長閑。爲臣治此疾。君亦使長閑藥之可也。公不聽。重次艴然曰。君疾必有不可諱。臣老矣。請先自殺以待君於地下。言畢起去。公召之曰。汝病狂乎。何遽自殺爲。且吾死之後。汝等豈不可戮力以保國乎。重次曰。保國者。自當有其人。若臣小少從軍被數十創。舉世所謂殘疾者。衆之臣躬矣。特以君眷愛。至今猶得備下僚。君若棄群臣。四隣諸侯舉兵來伐。誰復力戰拒敵者。一旦社稷淪喪。臣必不免彷徨餓死道塗。否爲人所揶揄曰。彼故事參河者。今何廼爾。臣與其如此。不如速自殺之爲愈也。甘利昌連之在甲。人莫不崇敬。今則降隸於本多忠勝。臣嘗哀之。此豈獨哀昌連而已哉。且君忌醫不肯治疾。與勝賴酷暴亡國何擇。公曰。善。卽召長閑進藥。重次爲置大艾於疔上灸之。痛稍減。重次喜極。不覺啼哭。

一二　井上正就駿府へ御使の事

台德院殿。太田某に五百石の祿を賜はりし時。太田折紙を擲かへし。退出しけるを。死罪と思召けるに。井上主計頭正就。駿府に申て後。罪を定められ候へと申す。さらばとて。井上駿府に參りて。東照宮にかくと申を聞し召。泰

平久しかるべき基なり。太田は誠に無禮なり。凡賞罰中らされば。下の恨るは常の事にて。太田も無禮とは知たらん。己が身をすてゝ諫る心なるべし。臣下の直言して諫る者。怒に逢て刑罰せられ家を亡し。大軍の中にかけ入る者は。多くは身を全うして功名を立る。故に昔より。諫臣を忠の第一とす。然るに。今太田にあたふる祿。賞に中らさるやと。汝を以て問るゝ事。政務に心を盡さるゝなれば。泰平の基と謂にてこそあれ。汝にものがたりせん事あり。われ三河にて。池の鯉を。鈴木久三郎が取て烹て喰ひ。信長より賜ひし酒をも。われにあたへたりとておもふさまに飲たりき。吾怒て眉尖刀を提。鈴木を呼しに。鈴木肌をぬぎ。大音をあげて。魚に人を替る不道にて天下に旗揚んとは。思ひもよらずと罵りし時。予鈴木が

詞に屈伏して內に入。つく〳〵思ふに。走りの者。池にて鳥を取し罪にてとゞめ置しを。諫ん爲ならんと心付て。走りの者を赦し。鈴木を近付。汝が志返す〳〵悅しきと。いひしかば。鈴木涙を流し。密に申べき事を。今戰國の時なれば。手あらなるがよきと。存候て無禮の詞を申せしに。かゝる仰を承りて。辱さの身にあまりて候といひし也。今太田にも三千石の祿をあたへられよとて。井上をとゝめ給ひ。御刀を賜はりしかば。江戸に歸りてかくと申す。太田にも祿を增賜はりしかば。涙を流して喜びけり。台德院殿井上には。汝が詞によりて孝行を知り。賞罰の道をわきまへたりと仰有て。左文字の刀を賜りけり。

台德公賜二太田秩五百石一。太田怫然。擲二還書一起去。公怒

東照公明睿察見事狀表裏洞然猶爲溫言慰藉以闡御嗣君不得我逾而吾兄記之亦略無露端倪巧々

將誅之。井上正就曰。請告於駿府。而後行刑。乃遣正就報狀。東照公悅曰。吾今而後知將軍能保治安也。夫賞罰不中。群臣懷怨。固其所也。顧太田亦非不知缺於禮敬。特欲殺身以强諫耳。大抵爲人臣。犯顏抗言。必干威怒。誅不旋踵。遂至亡家。而冒陣死戰。反全軀命。榮耀延世者。往往有焉。自古重忠讜之士者。以此也。今將軍虞太田賞不酬勞。特遣汝來咨。用意治道如此。豈非國家無疆之休乎。居吾語汝。吾少壯在參河時。有鈴木久三郎。捕池中鯉魚。烹而食之。又飲織田右府所贈美酒。略盡。吾卽提眉尖刀。將戮鈴木。鈴木肉袒勵聲曰。以一魚

之。故殺人兇逆。如此寧得復稱雄於四海乎。吾聞之悟。遽入內。先是有走卒捕池中鳥繫獄者。吾知鈴木意在諫之。亟命赦捕鳥者。更召鈴木。慰諭曰。吾極知卿忠義。語未畢。鈴木頓首流涕曰。臣理當密進言。特以隣國紛爭。日事干戈。納諫亦宜以剛勵將之。遂至發狂言。不意蒙君特恩。臣死且不朽。今太田亦如此。卿謂將軍益賜三千石可也。因留正就賜以寶刀。正就還具以東照公言聞。於是益賜太田秩三千石。太田乃涕泣拜賜。公謂正就曰。由卿言。得事親之道。又因以明賞罰之法。特賜左文字寶刀。以賞之。

一三　小早川隆景遺訓の事

安藝中納言毛利輝元は關ヶ原の時。秀家と共に。德川家に弓箭を取れしかとも。關ヶ原に自ら赴かさるの故に。安藝備後等の國を削られ。長門周防兩州を賜はりけり。是より前小早川隆景遺訓して。輝元を諫められし中に。毛利家五十餘郡を領し。富貴誠に溢れたりといふべし。此より後。苟にも國を貪る心あらば。忽滅ふべきよと。いましめられしに。輝元隆景の戒を忘れ。果して國を削られたりき。隆景先見の明かなる。露もたがはざりけり。隆景は武勇のみにあらす。智謀にすぐれたり。父元就病重くなりて。其子を集め。兄弟の數ほど箭を取寄せ。多くの矢を一つにして。折たらんには。細き物も折がだし。一筋づゝわかちて。折たらむには。たやすく折るよ。兄弟心を同くして。相親むべしと。遺言せられしに。隆景其時。爭は欲より起り候。欲をやめて。義を守らば。兄弟の不和候まじと。いはれしかば。元就悅びて。隆景の詞に從ふべしといはれしとぞ。秀吉九州を討平げられて後。筑前五十萬石を小早川にあたへられしに。隆景これは吾に過たる事なり。此頃まで。敵なりし身に。大國をあたへらるゝは。吾を愛するに非ず。九州をなづけん爲の。かりの謀よと思ひて秀詮に國を讓り。備後の三原に引こもられしとなり。

關原之役。毛利輝元首應西軍。及敗。東照公以其不躬蒞陣。特宥之。削六州。獨存長防二州而已。前是。小早川隆景臨終諫輝元曰。我提封五十餘郡。富强足矣。今後

君慎勿爭地進取爲若然是自速禍也至是果如其言隆景非獨以材武顯最有識度初其父元就疾病盡召諸公子使取矢如兄弟數曰矢雖小聚之爲一不可得折若一一而折之亦非難也汝等兄弟頗有與此相似者吾死同心協力和輯以保國隆景曰爭生于貪苟窒欲安分無由而開釁也元就悅謂諸公子曰汝等宜以隆景言爲戒及豐大閤討定九州封隆景前筑五十萬石隆景曰吾與大閤爲仇敵久矣今乃遽封以大邦是非愛我也特籍以懷柔九州諸豪耳吾不敢當於是固請公姪秀秋爲嗣以國讓之退居于三原隆景深謀遠慮率此類

一四　加藤光泰大言の事

朝鮮にて秀家を始都城に在しに加藤清正進で行程數日を隔つ諸將粮盡んとする時加藤遠江守光泰獨云清正都城を放れて敵に向ふ人々都城を去て食に就んとせは清正を捨殺すべし今爰を去るものは復男子の交はならじ清正を捨ん事日本の恥也といふ人々粮既に盡たりいかゞせんといはれしかば遠江守怒て砂を喰んものをといふ砂はくはれじといへば遠江守居丈高に成て汝等砂を喰ん樣よもしらじ我教ふべきとて福島正則をきつと見ていかに市松いつの間に大きに成たるぞやとて又秀家に向て今までは中納言殿と敬ひ

中たりき。けふよりは。中納言めと申べし。清正を捨殺し恥を異國にさらす人々なりと。いひすてゝ坐を立處に。清正粮盡て。都城に引退き。三里計の近所に陣したりと告來れり。遠江守は清正と生死を同じくせんと。おもへるにまぬかれけり。

朝鮮之役。諸將方保于都城。獨加藤清正。引兵東北入咸鏡道數百里。已而城中糧竭。諸將議欲棄城退就食。加藤光泰曰。清正孤軍深入敵境。今去都城。是餒清正於敵矣。敢曰去者。非夫也。吾不能復與交歡。且委棄清正。豈不遺恥於異類乎。皆曰。奈糧竭何。光泰勃然曰。糧竭。食砂耳。曰砂不可食。光泰曰。公等未知食砂之方乎。

我請教之。顧見福島正則。因呼其小字曰。市松。卿幾時廼爾長大也。又謂浮田秀家。曰初吾崇公。稱諸人必曰中納言殿。公卽委棄清正。辱名於戎夷。吾將貶公曰中納言女。勿復崇公爲。和言殿爲尊稱。女讀如默。甚疾惡之之聲。光泰言畢卽起去。意蓋欲與清正同生死。會清正亦以糧盡退。距都城三十里止舍。報至。遂得與俱就食。

一五　石谷定清御供に參る事

石谷十藏定清は。先祖は遠江石谷村の人なり。大阪御出陣の時。江戸に殘させ玉ひしに御跡より。從者一人に。具

足箱を脊に負せ自ら鎗を荷ひて。潛に江戸を出駿府にて追付奉りけり。至て心易かりし。御近習の人にたより。江戸に殘り申事口惜く存。重き御法を破りて參りぬ。首を刎られん事は。素より覺悟したる事なればいかに御咎蒙らんとも。露ばかりも悔む事は候はずと。申上て給はり候へといひしかば。將軍には。殊に法制を嚴に思召たまふなれば。爭か御ゆるされの有べき。もし御宥あらんには。御あとより引つゞきて。追々に來るべければ。必烈しき刑に行はれなん。されとも捨置べき事ならねばかくと申すに。台德院殿默してをはします。十藏は既にわが事聞えつる上は。今夜か明朝は。首を刎られなんと相待居たりしに。十藏よへと召れけり。思ひ極めて進み出れは。如何して法を破りたるや。にくき奴哉。切て棄ばやと思へども若き者なればゆるすよと。仰出されて黃金二枚賜りけり。さて江戸へは。重ねて誰人にもあれ。一人も忍ひて御供に參たらは。重罪たるべしと。固く仰出されたるとなり。

石谷定清。其先遠州石谷村人。大坂之役。留在江都。已而篚其甲。使奴負之。躬荷槍。追及台德公於駿府抵其友爲近臣者。請曰。吾受命留在都。無復效力軍前。吾不勝至恨。今也犯大憲而至。自分誅葅。但得因子聞之公。而後就死。吾所願也。其人以公素重法令。若聞。定清必不免戮。否後有繼至者。無以處之。然事不可中已。乃入以狀聞。公默然。定清知事既聞。以爲死在旦暮。少頃。公

謂左右曰。呼竪子至。定淸入見。公曰。竪子敢犯法令。罪當斬。所以得不死者。爲其尙壯。特宥之耳。賜以黃金二枚。更馳使嚴令江都處守者。勿得繼至。

一六　辻小作中黑道隨が事

辻小作は。福島正則に仕へしか可兒才藏と親しみ深く。共に世に聞えたる物しなり。中黑道隨は石田賓客の如くもてなし置けり。關ケ原の軍敗れし時。中黑唯一騎落行兵の中に蹈止り。さん〳〵に戰ひけるを。辻見ていざ討とらばやといへば。可兒なさけなき事をも。いふものの哉。たすけばやと云。辻さては生どれとや。可兒に好まれて。辭し難しといひす。てゝ。馳行ところに。中黑馬を深田に打入て。諸鐙を合せても更に動かず。辻詞をかけ。日頃のよしみに。助んずるよ。早く取付とて鎗の鐏をさし出す。中黑かゝるきはに。命助かりても何にかせんとて。既に自害すべく見えしかば。辻何とたばかるべきや。神明にかけて。いつはらじといへば。とりつきたるを。辻主從引あげて。陣所に歸る。可兒見て大に悅びけり。さて辻は物具脫て。裸になり。仰に打臥して。只今まで敵なりし中黑を。物とも思はぬ有樣にて物語す。中黑あまりに侮りたるよと。心中にいかりけれども。命を助けたりし恩を思ひて。さてやみぬと。後に中黑此事を語りて。笑ひしとなり。中黑後井伊直孝招きて。祿二千石あたへられけり。

或說に。丹波山城。谷出羽。篠野才藏。稻葉內匠。中黑道隨。渡邊勘兵衞。辻小作。兄弟の約束して。武勇を勵み。天下七兄弟と云しといふ。

寫當時死士以兵爲戲之風可謂逼真矣

逵小作事福島正則。與可兒才藏友善。皆以驍武顯。中黑道隨亦與二人相識。石田三成。愛中黑材勇。待以賓禮。關原之役。三成兵皆敗走。中黑獨留戰甚苦。逵望見曰。吾且往擊殺之。才藏曰。吁、子何忍也。吾必逸之。逵曰。卿豈欲我生獲之乎。果然。吾亦安得自異。卽馳去。中黑方陷于淖。屢躍馬不能出。逵曰。以與子有舊。願得免子。倒槍授之鋍。中黑曰。事至于此。吾復何以生爲。將自殺。逵曰。吾豈行詐者。質之神明可也。中黑乃援鎗出於淖。遂與俱歸。次。可兒亦大悅。少頃。逵釋甲。躬而偃臥。與中黑言。甚自得。若不復以中黑寘眼底者。中黑意不樂。特以倚而得免。無敢發也。後爲人言之大笑而止。中黑晚爲井伊直孝所聘。食秩二千石。或傳。逵與中黑可兒。及丹波山城。谷出羽。稻葉內匠。渡邊勘兵衞。約爲兄弟。相尙以勇。號七兄弟云。

一七　梶左馬助御書を認る事

關ヶ原の戰ひに。祐筆梶左馬助。かねて御書を九月十五日の日付にて。今日巳の刻御勝利と認置けり。東照宮御感有て。十五日とさしたるは尤なり。巳の刻とはいかに。左馬介承り。敵は大軍なり。巳の刻を過たらは。御敗軍と存たりきと申けり。

左馬介は。上田善四郎か四男にて。祿四百石。後千石賜

はりて御使番なり。

關原之役。東照公書佐梶左馬助。豫作捷報曰。九月十五日巳牌。大軍實先鳴矣。公後見之。感嘆。因問卿以十五日爲期。固善矣。不知何以知巳牌敗賊。對曰。賊兵甚衆。若過巳牌。我軍或不免左次。臣是以知之。左馬介上田善四郎第四子。秩四百石。後爲行人。食千石云。

一八　山田勘六郎討死の事

利長の兵山田勘六郎は。十四歳にて父の仇を討たる人なり。ある日利長拏藏の戸を開くとて。山田に鑰をあつけられしゆゑ。急ぎ來れと呼れしに。おそかりければ。忿て持たる杖にて突れしに。思はさるに額に中りて血流る。跪て平伏せしに脇差の鞘走りければ。手むかひもするやとてたゝみかけて。杖にて打んとせられしを。かたへより。山田を引のけたり。山田此より病と稱して。引こもり居たりしに。關ヶ原の亂起りて。利長大聖寺の城を攻る時。一段高き所に打上り。武者おしを見物せらる。山田五六十人計引具し。げふを最期と。出たちておし通り。城につくと先がけして一番に乘込。鎗にて乳の下を突とほされ。痛手なれば。堞の下におつる。かねて從者にいひふくめしかば。息絶ざる内に。利長の前に舁來る。利長見て。後悔せらるゝ事甚しく。其あやまちを。懇にことわりて。涙を流さる。山田やがて死けり。行年廿歳。世にすぐれたる美男なりしが。大剛のはたらきして討死しける。其前日したしき朋友に。奇南香をわかち贈りしを。其頃

大聖寺きやらといひて。もてはやしたりといへり。

前田利長臣。山田勘六郎。年十四。擊父仇殺之。已而爲利長近侍。利長嘗屬內庫鎖匙。已而欲發庫。急召之。踉蹌入見。利長怒其不亟至。以杖撞之。中額見血。山田惶恐。遽跪伏席。適副刀微挺。利長以其欲拒敵也。益怒。將復擊之。左右掖之退。遂稱病家居。會東西搆兵。利長爲東軍。攻大聖寺。登高阜以觀師。山田將五六十人從前過。遂先登。爲城兵槍貫乳下。墮於崖。豫命從者。及未絕界至利長前。利長深自悔恨。流涕謝過。少頃遂死。方弱冠矣。山田美風姿。當時罕比。先戰一日。分所藏奇南香贈所親。皆相傳寶重。號曰大聖寺奇南云。

一九　福島家の士大將東照宮を拜する事

關ヶ原の軍に功有ける。諸將の家臣を召て。東照宮御盃を下されし時。福島正則の士大將。福島丹波は跛。尾關石見は瞎なり。長尾隼人は聾なりしかば。近習の人々能もかたはの集り候と。さゝやきけるを聞し召。汝等年若くとも能聞け。女は容儀を尊ふ事よ。よし形はいかにもせよ。かゝる軍に功名したるを。男とはするぞかし。彼三人は世に勝れたる大剛の者なり。汝等が志十に二三を。彼者に似せたらんは。よかりなんとぞ。仰せられける。

關原之役。東照公已敗西軍。召見諸侯臣有功者。賜酒褒寵之。福島正則臣。福島丹波。尾關石見。長尾隼人。更

進受觴。丹波跛。石見眇。而隼人則聾。公左右相與附耳語曰。何不全人同萃于一堂也。丹波等已退。公曰。唯女子貴色而已。若夫士復何有於形貌。苟能從軍建殊功。斯謂之士矣。夫三子者。皆驍勇絶倫。汝等或有似彼十之二三者。吾亦尚之。汝等雖少。聽我言。自戒可也。

二〇　池田家使宮城南部救尼崎城事

大阪冬陣ニ。池田越前守命ヲ受テ尼崎ノ城ヲ救フ。兵寡シテ而モ大阪ニ近ケレバ。請ニ依テ松平武藏守利隆。同左衞門督忠繼ト。相共ニ計リテ加兵ヲヤル。利隆ハ宮城筑後。忠繼ハ南部越後ナリ。何レモ武功ノ士タルニ由テ擇ル、者ナリ。各騎士三十人鐵砲百挺ト相定ム。筑後ハ先立テ尼崎ニ至リテ。南部ヲ待ドモ未來。二三日過テ後。使ヲ以テ今日參著ノ由ヲ筑後ニ云遣ス。悅テ中途マデ使ヲ出シ。我二三日以前ヨリ此ニ來ル。旅宿ナレドモ少ハ居馴タレバ。今晚從僕マデ不殘一飯ヲ可侑ト云送ル。南部便懇情不少承意ニ可從ト返答ス。筑後遙ニ出迎ヒ。打ツレテ抵尼崎。南部筑後ニ向テ。貴殿ハ此ヨリ歸ラレヨ。我ハ先此邊ヲ打巡テ。頓テ跡ヨリ可行ト云ヘバ。宮城ハ歸ル。南部從者ヲバ皆遣シテ。鎗持馬取步者二三人ニテ。郭外ニ乘出ス。已ニ日暮ニ及テ南部歸來ル。宮城南部ニ何ソ遲カリツルヤト問。南部又ト云モ延々ナレバ。城ノ構ヘ地ノ利。万委ク見タリト答フ。飯後ニ南部宮城ニ問。口々ノ手分所々ノ番人等ハイカニト。宮城ガ曰。貴殿ヲ待テ未令。南部又問。船場ノ用心敵ノ寄ベキ道筋ヲバ。

見屆ケラレタリヤ。宮城ガ曰。獨決シガタクシテ未レ見。南部ガ曰已ニ怠レリ。片時モ忽ニスベカラズトテ。卽チ筆取ヲ呼テ役付ヲ定ム。某ノ口々ハ騎士何人足輕何人。其法ハカク〳〵也。餘ハ遠淺ニテ船ノ可レ著ク所ニ非ズ。既ニ定リテ後。南部敵ノ情ハ量カタシ。敵只今ニモ寄來ラバ。爲ニ敗ラルベシ。貴殿此ニ來リテ二三日ノ間。手分ナキハ我ヲ待チ評議セントノ事ナルベシ。サレドモ事ヲ讓ン時ニアラズ。モシ故アリヤトイエバ。宮城愧ル色アリ。南部云。フクムベキ事アリ。町々ノ目代ニ來レトテ呼ヨセケレバ。目代ドモ四五人來ル。宮城坐敷ニ居テ此ニト云ケレドモ。南部子細ノ候トテ。庭ノ戸口ヲ明サセ。白砂ニ呼入タリ。目代共宮城南部ヲ敬セズ。立ナガラ手ヲ組デ。我等ニ何ノ御用ガ候ト云。南部怒テ目ヲ嗔シテ曰。苟モ

源君ノ命ヲ蒙リテ。宮城南部池田家ノ援兵トシテ此ニ來レリ。身不肖ナリトモ。源君ヲ重ゼバ我儕ヲ敬セザラシヤ。若一戰ニ及テ身方利ヲ失ハヾ。汝等盡ク敵ノ爲ニ斬虜セラレ。貨財ハ盜ノ有トナラン。今我儕ヲ侮ハ。敵マデモナシ。忽汝等ヲ斬斷スル事。我儕ニアリト。其時目代等大ニ恐テ。皆膝ヲ屈メ首ヲ低テ額ニ汗ス。南部ガ曰。我今日ノ來路ニ所見。往還ノ町口ハ。ソコトソコト也。又此外ニアリヤ。目代ガ曰是ノミ南部ガ曰其口々ニ番人ヲ置テ。往還ノ旅人アラバ。一飯ノ支度バカリニテ。一夜モ宿セシムル事ナカレ。番人ノ中一人是ヲ見送リテ。上リナラバ上リ口ノ番人ニ理レ。下リナラバ下口ノ番人ニ理レ。晝夜ノカハリ時ヲ定テ。少モ違事勿レ。番人ノミヲ恃トセザレ。汝等一人必ズ代々番所ニ居テ。相戒テ下知

セヨ。若怠弛アラバ卽汝等ヲ戮シテ宥サジ。早ク歸テ令セヨト。目代等一々承ヌトテ出ル。其一人ヲ使トシテ。町奉行ノ所ニ。對談ノ上ニテ万可申合ニテ候。ソレヘ可參ヤ。コレニ入來アルベシヤト云遣シケレバ。町奉行頓テ來ル。南部一禮ノ後。今マデ町口ノ番モナシ。與ニ謀テ後令ヲ下ス事本意ナレドモ。遲々ニ及ノ條。暫時モ早キ事身方ノ爲ナレバ。申付シ也。目代ノ懈怠アラバ。卽坐ニ斬罪ニ處セン。命令嚴ナラザレバ。軍ニ利ナキ事御存ノ道ニテ候ドイヘバ。町奉行尤ナリト云。卽誘引シテ番所ニ到レバ。目代見ヘズ。呼之ニ傍ヨリ出タリ。南部ガ曰。汝怠レリ。必ズ一人ハ此所ヲ去サレ。休息ノ場ニ非ト堅ク。令シテ歸ル。ソレヨリ宮城ト相議シテ。日夜ニ三四度俱ニ自番所ニ至テ。怠ルヤ否ヲ相闘テ。常式トス。然レドモ時

ヲ定メズ兩人番所ヨリ歸ル時。舟場ニ潮滿タリ。宮城ガ曰。此所敵船ノ可著カ。番ヲ置テ守ラスベシト。南部ガ曰。昨日我ヨク見之。船ノ著ク所ニ非ス。奥少深ケレドモ口淺シ。若シ船ヲ著バ歸路ニ泥ン。却テ味方ノ獲ナラント。宮城又曰向ニ大ナル竹籔アリ。燒拂テ遠ク見透サバ可也ト。南部我計之敵ヨセ來ラバ大軍ナラン。竹籔ヲ恃テ兵ヲ匿ベキ理ナシ。却テ身方伏ヲ置ニ便アリ。如シ大軍ニテ竹籔ヲ恃ムノ意アラバ是弱敵ナリ。恐ルニタラズ。況ヤ是民ノ產ナルベシ。故ナクシテ燒拂ハ。身方ニ仇スルニ似タリ。宮城二事ナガラ。南部ニトラレズシテ赤面ス。南部又宮城ト議シテ。小屋ノ前ニ柵ヲ付ルニ。宮城ハ下僕ニ令シ。南部ハ自身見之。南部宮城ガ柵ヲ見テ謂テ曰。貴殿ノ柵ハ弱シテ駒ヨケノ如シ何ゾ自不見シテ下

僕ニ令スルヤ。宮城南部ガ柵ヲ見ルニ。小屋ヨリ二三十間バカリ出シテ付タリ。柵際ニワラ筵ヲ敷。足輕ニ下知人ノ士ヲ加ヘ。番人ヲ置タリ。其體嚴整侵スベカラス。南部ガ曰。此柵ヲ恃テ。アナガチ敵ヲ防ギ止ントニハ非ズ。第一用心ニ不ㇾ怠ハ。敵ヲ威スル處ナリ。貴殿ノ柵内狹シ。鎗鐵砲ノフリ廻自由ナラジ。然ハ利スクナキカト。宮城歸テ柵ヲ付カヘタリ。大阪ノ兵尼崎ニヨセントス。其備アルコトヲ聞テ止。是南部ガ力ナリ。宮城モ聞ル武士ナレドモ。此時ハ南部ニ及バザル事遠シ。宮城後ニ人ニ語テ。如ㇾ南部ハ一當ㇾ千者ト謂ツベシ。實ニ國ノ重臣トスルニ耻ベカラズ。我棧シテモ非ㇾ所ㇾ及トテ大ニ嘆稱シタリ。

武將感狀記下並同。蓋本編用國字尤多紕謬。以其刊布已久。亦未敢改定也。

原文極拉雜大抵諸家皆難乎措辭者乃雍容間澹絕不見斧鑿之痕眞可貴也

大坂之役。東照公使池田長幸援尼崎。以其密邇大坂而兵寡也。乞師其宗松平利隆兄弟。利隆遣其將宮城筑後。弟忠繼遣南部越後。皆將騎三十卒百人。筑先至尼崎。間一二日。聞越且至。使人謂之曰。僕在此。稍得弛負擔。願爲從者備一夕之餐。越曰。幸甚。及至筑迎諸郊與俱入城。越曰。吾子先就次。吾且巡城而後得相見。盡遣從者。獨從數卒還出郭。徧巡要阨處所。日暮入次見筑。筑曰。何晏也。曰。不亟巡視。恐無以應卒。今巡街坊要阨處所皆遍。所以晏也。已飯。越謂筑曰。近城衢路。皆已置兵防守乎。曰。欲待子至與謀。有以處之耳。曰。沿海港

汊。敵恐有掩襲。君能按之。盡其曲折乎。曰。此亦非僕所能斷。未敢專也。越曰。事急矣。豈容優游如此乎。遽召書佐。簿錄分兵。并授以方略。除洲沙廣斥。不可泊舟。餘莫不有守禦。已定。謂筑曰。寇不可狃。一有侵軼。悔何及也。吾子在此數日。略無施設。以待僕至。然方事之殷。儻非有他故。寧得懷謙讓乎。筑默然頗有愧色。越又召坊吏數人至。筑欲令就坐。越不聽。令開閤門。延至階下。皆叉手并脚。略無恭遜色。曰。公等召我欲何爲。越勃然勵聲曰。內府遣吾儕援是邑。汝等能慢我。獨不畏內府嚴命乎。卽戰不利。汝等皆爲敵魚肉。寧得復有貨財也。今敢

爾驕慢。設無敵禍。我能戮汝。無有赦。語未畢。皆惶怖俯地。泚然汗額。越曰。城中坊街。吾所見爲亾亾。寧有外於此者乎。曰。無有。越曰。每坊首置舖舍。使坊中數人更守望。日夕無怠。有行旅過者。爲給食遞次傳送。勿得留宿。汝等亦必輪一人。在舖監督。苟有懈弛。我必戮汝。皆曰。謹奉命矣。乃遣歸。令其一過謂市尹曰。急欲有得面與議。非忝見顧。僕將就見。如何。市尹得報踉蹡來見。越卽告以所命坊吏。且曰。理當與謀而後命之。然臨軍貴速辨。否恐無裨於事。且吏若有不警。要當登時就戮。夫令不嚴無以軍。君所知也。市尹曰。誠如公言。遂與俱巡視

舖舍。吏適不在。呼之從傍舍出。曰。汝何敢爾。此豈懷安之時乎。固戒勿得去舖舍。自是越與筑日夜巡視。無復定期。以察其勤惰。嘗巡視而歸。過海港潮方漲。筑曰。敵恐舟載而至。何不置兵守之。越曰。吾昨按之。近岸尤深。益遠益淺。敵若乘潮而至。不能復還。不過爲我擒耳。筑又指一竹林曰。燒之使可遠望如何。越曰。敵至必衆。豈復翦林自救也。果爾定爲孱兵。何足畏哉。不如置之以便於我之設伏。且此亦民家之產。燒之秖歛怨耳。不聽。越與筑異次而居。皆柵于前以自固。其樹柵筑委之家奴。越則躬親督之。已成。謂筑曰。子柵不牢。猶如行馬。何

不親督作。而任賤者爲。筑視越柵。占地二三十步。使數卒在內地坐守之。監以一士。越曰。樹柵未必足拒敵。然備之嚴亦所以示威也。子柵太狹。不可用長兵。未見置柵之便也。筑乃復改樹柵。大坂兵將襲尼崎。聞其有備遂止。一城因得以免兵燹之災者。越之力也。筑亦素以材武顯。然是役也。每議事皆不及越遠甚。語人曰如南部。一能當千者。不負爲國重臣矣。非吾所及也。嗟歎久之。

二一　眞田幸村與伊達正宗戰野村事

同夏陣ニ五月五日ノ朝。眞田左衞門佐幸村ノ物見。先ヨ

リ駈歸リテ。旗三四十本人衆二三萬計。國府越ヨリ此方ニ踰來候ト告グ。是伊達陸奥守正宗也。士卒スハヤ。只今此備ヲ推出サル、カト。勇メル氣色ナリ。サレドモ障子ニ靠テ。片膝ヲ立テ居タリシガ。徐ニ應ヘテサアラントバカリニテ。外ニ言ヲ不レ出。日午ナル時。物見又駈歸テ。今朝ノト旗ノ色替リ候ガ二三本。人衆二萬計。松陰ニテサダカニハ見エズ。龍田越ヲ押オロシ候ト告グ。是松平上總介忠輝卿ナリ。幸村ソラ唾シテ居タルガ。目ヲアケ。ヨシイカ程モ踰サセヨ。一所ニ集テ。擊敗リタランハ。大ニ快カランモノヲトテ。一向是ニ取合ヌ體ナレバ。皆ハヤリタル氣モ稍シズマリヌ。是大敵ヲ恐レシメジ。身方ヲ躁セシトノ事ナルベシ。夕炊畢テ後。此陣所ハ戰フニ便リナシ。イザ敵近クヨランントテ。一萬五千餘。正奇ヲ紊ズ

前後ヲ不レ混。騎士歩卒次第ヲ整テ推出セバ。敵縱ヒ十倍ナリトモ。不レ足レ惧トゾ思ハレケル。其夜道明寺表ニ陣ヲ取テ。營法軍令嚴ナレバ。敢テ侵掠スベカラズ。明レバ六日ノ早旦。野村邊ニ到ル。渡邊内藏之助紀ハ。幸村ニ先ダナテ水野日向守勝成ト戰フ。紀勝成ヲ切靡ル事五六十歩。勝成モリ返シテ紀ヲ擊卻ケ。互ニ力鬪三度ニ及ンテ。紀深手ヲ負ケレバ。人衆ヲ脇ニ引取備ヲ立直シ。幸村ニ使ヲ遣ハシテ。只今ノ迫合ニ創ヲ被リテ。復戰フ事成ガタシ。然故ニ貴殿蒐引ノ妨ナラント存。脇ニ引取候。且ツ横ヲ擊ントスルノ勢ヲ見セテ控候。是猶貴殿ノ一助タルベキカトイヘバ。幸村御ハタラキノ程目ヲ驚シ候。此ヨリ我等受取候ト返答シテ。軍ヲ前レバ。正宗ノ多兵蒐リ來ル。野村ノ地形ハ。前後ハ岡ニテ。岡ノ上平ナリ。中間

十町バカリ卑クシテ。道ノ左右田疇ニ連レリ。幸村ノ先鋒岡ノ上ニ半スギ推アゲタル處ヲ。正宗ノ騎馬鐵砲八百挺ヲ一同ニ打タテタリ。此騎馬鐵砲ト云ハ。伊達家ノ士ノ二男三男壯力ノ者ヲ擇ビ。本ヨリ仙臺ハ馬所ナリ。駿足ヲスグリテ乘シメ。奥州ニテ所々ノ戰ニ。馬上ヨリ鐵砲一放ト定テ。ウタスルニ中ラヌ玉ハ稀ナリケリ。打立ラレテ敵ノ備亂ル、處ヲ。鐵砲ノ煙ノ下ヨリ直ニ乘込テ駈ケラス。馬蹄ニ蹂躪セラレテ敵敗績セズト云事ナシ。此時騎馬鐵砲先手ヨリ一二町モ前ニ進テ連發スルニ。鉛子ノ飛ハ雹ノ如ク。火藥ノ光ハ電ニ似タリ。煙ハ忽雲霧ト爲テ。丈尺ノ間モ見エ分スサレバ。岡ノ上ニ推上タル幸村ノ兵士多死傷シタレドモ。幸村鐵砲ノ煙ノ中ヨリ。先鋒ニ馳來テ。爰ヲ怱ヨ大事ノ場ゾ。片足モ引バ全ク歿スベシト下知スル聲耳ニ徹ス。村々立タル松原ヲ楯トシテ。鎗ノ柄ヲ握リナガラ平伏ニ成テ。後ニ退者ハナシ。始兵ヲ合セントスル時。幸村令ヲ下シテ。胄ヲ著セズ鎗ヲ取セズ。馬ノ傍ニ引添テ。下知セン時ヲ待セタリ。敵合十町バカリニナリケレバ。幸村使番ヲ以テ胄ヲ著ヨト云。於是皆持セタル胄ヲ取テ打著。忍ノ緒ヲシメタリケレバ。勇勢新ニ加テ兵氣愈盛ニナル。敵合已ニ二町バカリアラント思フ時。幸村又以使番鎗ヲトレト云。於是手々ニ鎗ヲ取テ。ホサキヲ敵ノ方ニサシ向タレハ面々何ナル勁敵堅陣ナリトモ擊摧ント別ニ魂ヲ入タルガ如シ。ヒタ〳〵ト鋏砲ニウチ斃サレナガラ。一足モ退ザリシハ。胄ヲ著鎗ヲ取リタル氣勢ノ壯ナルニ由テ也。敵は倍々。而モ累代恩ヲ得テ守レ義思レ忠ノ士ナリ。身方

ハ寡少。殊ニ元來撫循シタルニ非ス。新附假合ノ徒ナリ。勝算彼ニ在テ。敗形我ニアリ。然ルニ如此ナルハ。幸村良將ノ器。大阪城中勇知第一タルベシ。サテ正宗ノ騎馬鋏炮ノ士。馬ヲ入ント駈寄ケレトモ。折シキタリト見テ。タヾヨウ處ニ砲聲モ絶々ニナリ。烟モ稍薄クナレハ。幸村其シホアイヲヤ計リケン。大音ヲ揚再拜ヲ振テ。カヘレト云詞ノ下ヨリ。皆起立テ直ニ突テカヘリ。正宗ノ先手ヲ七八町追崩ス。後備ノ將秋甫刑部ト。幸村ノ兵士西村孫之進ト鎗ヲ合ス。刑部カ子甚平。父ヲ討セシト中ニ隔ル處ヲ。初鎗ニ綿嚙ノハツレヲ撞損シテ。アガリタルト思ヒ。二ノ鎗ニ草摺ノ間ヲ撞テ。ハネ倒シ首ヲ取ントスル所ヲ。甚平カ從者二三十人。西村ヲ斬事幾刀ト云事ヲ不知。鎧ノ上ニテ傷サルヲ。其中ニ以鎗腰ノ骨ヲ刺レ。痛手ナレハ。目眩テ已ニ絶入ケルカ。幸村總軍競カヘリテ追拂ハ。西村カ首ヲモトラレス。甚平カ首ヲモ不取得甚平ハ其創ニテ陣屋ニ歸テ死ス。西村ハ幸ニ死セサル事ヲ得タリ。於是勝成正宗ヲ勸テ復戰シム。正宗我師已ニ疲タリ。合戰ハ今日ニ限ルヘカラストテ不聽。勝成小敵ヲ目前ニ置ナカラ。忠輝卿正宗縮居ハ恥ニアラスヤト。又忠輝卿ヲイサメ立ツレ共。忠輝卿不果。勝成ハ兵少ニ由テ。獨戰事アタハスシテ已ヌ。未ノ刻マテ幸村合戰ヲ待テ居タリシカ。ソレヨリ繰引ニ引取タリ。其體肅然トシテ追討ントセハ却テ爲ニ挫カルヘシ。東師ノ見者感嘆ス。西村カ手負タル時。馬取彌右衛門ト云者。是ホトノ手ニ弱ルト云事ヤ候トテ。アトニ歸ル。西村ハ幽ニ其聲ヲ聞テ。見捨テ逃タリト思ヘリ。少間アリテ。腰手拭ヲ水

ニ浸シ。持來テ口ニシホリ入。氣ヲ付テ肩ニカケ。營陣ニ歸レリ。七日ノ戰ニハ。西村創ヲ病テ出サリケレハ。幸村討死ノ場ヲ荷モ免レタルニ非ス。尤奥深シ。

元和元年五月五日。伊達正宗與公子忠輝。相繼進攻城。公子自龍田嶺。正宗自國府嶺。眞田幸村候騎天明還報曰。東軍二三萬。踰國府嶺且至矣。幸村兵聞之。皆踴躍欲戰。幸村方負紙障。竪一足箕踞。徐應曰。吾固知其如此也。日中候騎復還曰。東軍至自龍田嶺者且二萬。方在松樹間。莫之能審。惟見一二旗幟與往踰國府嶺者有異耳。幸村佯如睡者狀。聞之開目曰。且縱之踰

此一段亦見賴氏外史蓋此愈於彼數等矣

險。聚而殲之。不亦善乎。於是衆稍定。日暮幸村謂其衆曰。置陣於此。頗不便戰。盍少進邀敵。遂將步騎一萬五千。成列而出。軍于道明寺。號令明肅。守備甚嚴。詰旦復進至野村。渡邊糺方與東將水野勝成戰。被重創。使人謂幸村曰。僕病不能復戰。且爲公疏行首。仍張兵如橫突陣者。亦足以翼公。幸村曰。觀君勤於戰。眞使人驚嘆。吾今代君戰。君且觀之。有高阜於前。左右皆耕地。當中稍低數百步。幸村乃麾兵上阜。就低處布陣。未終正宗兵大至。幸村令其衆皆免冑且臥槍於地。跪以待。初正宗勒子弟强健者八百。皆騎善馬。馬上發銃乘烟馳突。

所向無不摧破正宗常以是得志於東陲於是縱騎直進近數百步幸村令曰胄數十步又令曰執槍已而銃丸雨下死傷甚多幸村馳巡其衆曰勿動動則沒矣衆皆擁槍蓊松樹俯伏無一動者正宗兵見之氣沮幸村因舉麾號曰起衆卽齊起用槍正宗兵皆靡却走數百步幸村已收兵更嚴備以待東軍復進戰勝成勸正宗戰正宗曰吾兵疲矣且戰豈止于今日哉不聽勝成曰敵兵非衆也置之不擊獨不愧于心乎强忠輝忠輝不果戰勝成亦以兵寡不能戰而止時日已過午幸村乃引兵而退東軍觀者莫不感嘆其材勇方幸村追陸奥兵西村孫之進與正宗後隊將秋甫刑部遇刑部子甚平進鬬敝父西村鎚其肩不中更自甲裳間刺入揮槍仆之地且刎之衆至叢擊西村不入有一人以槍鎚其腰至骨遂僵屬幸村兵鼓譟齊進亦未及到西村獨扶甚平退已至次卽死西村久僵在地適牽馬奴彌右至曰公創淺何足以爲病乃走西村微聞之疑其逃也少頃蘸巾於水齎注其口候氣稍蘇負之去比幸村取終西村猶病創不能從非臨難苟免也

野史氏曰昔者韓淮陰擊趙使萬人先出背水陣及趙人空壁逐利兵皆殊死戰淮陰又豫出輕騎二千

議論精確殆見左衛門公善者機也

使淮陰始終從羽亦不過與羽同敗死於垓下其能建絕世之功者以擇主事之而已若夫幸村豈不知

人。人持漢赤幟。急入奪趙壁。遂能擧趙。後世稱之。幾乎不容口者。予觀眞田幸村與陸奥兵戰。麾衆上阜。就低處布陣。所以堅士心。使不得臨難却退。所謂陷之死地而後生。置之亡地而後存者。與淮陰背水陣無異。夫淮陰固驅市人戰之。而幸村所將亦出一時召募。非初得拊循者。顧幸村用兵。一若觀淮陰所爲做之者。無他。以所將同也。予又念。方幸村與陸奥兵戰。他東將擁强兵窺我後。者相望於遠近。非淮陰獨與趙兵戰者比。於是乎。聚一萬五千爲一隊。使其免冑臥槍以養勇蓄銳。遂能覆勁敵於一翻手間。其巧

從大坂無能爲特繼乃父之志殞身行陣以報大閤舊誼其設心固與淮陰不同也

於制勝。假令淮陰聞之未必不拊脾嘆賞也。嗚呼孰謂古今人不相及哉。抑淮陰一戰擧趙。爲漢高佐命功臣。而幸村遂不能救於大坂之亡。至以身殉之。予固偉幸村將略。而又重嘆其不幸也。噫。

二二　眞田安房守昌幸遺言之事

眞田安房守昌幸。關原ノ後。高野ノ久戸山ノ麓。禿(カムロ)ノ宿ニ潛居シ。常ノ志。秀頼卿ト源君トノ戰アラハ。大阪ニ與シテ。關東ヲ亡サントスルニアリ。圍碁ヲ好テ。幸村ト戲奕ス。是圍碁ニアラス。備立人數配リヲ試ルナリ。重病ヲ受テ將死。因テ嘆息シテ我ニ一ツノ秘計アリ。不用シテ徒ニ死ナンヤト云ケルヲ。幸村傍ニ在テ

聞之。思召ル、旨アラハ。家訓後學ノタメ。承置候ハ、ヤト尋ヌルニ。昌幸汝カ非所及ト云テ不語。幸村身不肖ニ候ヘハ。仰置タリトモ。カヒナキ者ト年來御覽シ捨ラレケルニヤ。素ヨリ庸愚ニシテ。人カマシク可申ニアラス。返々自愧入候ヌト。深ク恨タル氣色ナリ。昌幸汝恨ル事ナカレ。我以汝庸愚ナリトシテ。我志ヲ不言ニハ非ス。我ハ老功アリテ人ニ信セラル。信セラル、時ハ。言聽レ謀用ラレン。汝カ才器縱ヒ我ニ增レリトモ。軍陣ノ數ヲ積サルニ依テ名顯ス。名顯レサレハ金言モ聞レジ良策モ用ラレジ。同輩異論ヲ立。口々心々ナラハ。何事モ無益ナラン。然レトモ胸中ニ思コメテ。空クセンモ又ナゲカシ。サレハ汝カ爲ニ語ン。三年ヲ不過シテ。關東大阪合戰ニ及ヘシ。然ニ於テハ必ス大阪ヨリ我ヲ招カレン。招ニ應シテ出ルナラハ以我謀主トセラレン。其時兵二萬許ヲ請テ。青野原邊ニ出張シ。關東ノ軍勢ヲ支ン。汝知之ヤト云。幸村暫ク思按シテ。要害ノ地ニ據ニモアラス。堅確ノ城ヲ守ルニモアラス。隣國ノ援ヲ恃ニモアラス。二萬計ノ兵。而モ國々ノカリ武者。關東十倍ノ鋭騎健卒ヲ。平坦ノ曠野ニテ禦ン事。存寄モ候ハス不審ニ候トイヘハ。昌幸我モ亦可禦手段ナシ。雖然我武略ノホドハ。兼テ源君ニ見セ申タル事ナレハ。吾二萬許ノ人衆ヲ督テ道ニ待ト云ンニ。十拾廿萬ノ猛勢ナリトモ行ナリニ輙ク擊破ントハ思ハレジ。トカクノ評議アラン間ニ。四五日ハ過スヘシ。我好細ヲ付置。敵ヲ料テ輕ク引取。又勢多ノ橋ヲ墮テ。此ニテ又一支セハ。凡十餘日ハ攻上ル東師

ヲ所々ニ遏滯セシメン。昌幸ユソ關東ノ大軍ヲ支得タレトイハヽ、幾内西國ノ諸將關東ニヤ附ン大坂ニヤ與セント。兩端ヲ持スル者多ハ大阪ニ歸センカ。然ラハ大阪ノ兵内ニ取テ七八萬ニハ及ヘシ。其時人ヲ遣シテ二條城ヲ燒拂ヒ。盡ク大阪ノ城中ニ引籠テ。郭外ニ柵ヲ付。弓鉄炮ヲ備テ堅ク守リ。夜警信烽偵邏不怠。敵縱ヒ荐ニ戰ヲ挑トモ不レ應。屢我師ヲ辱シムルトモ不レ怒。ソヽロニ城兵ヲ僞引トモ不レ出。愈以レ佚待レ勞久持曠日ノ謀ヲナサハ。東師多ハ退屈シテ惰アラン時。或ハ夜擊ニシ。或ハ朝蒐ニシテ。身方ノ勇ヲ儲テ敵ノ心ヲ惱サハ。大軍粮乏ク氣疲レ。城ハ名城ナリ。敵怒リテ力攻ニセハ。柵ノ内櫓ノ上ヨリ。目當ヲ打カ如クニシテ。敵ノミ日々ニ死傷セン。於レ是書ヲ通シ使ヲ遣シ故大閤恩顧ノ諸牧ヲ招カハ。始關東ニ屬シタルモ。志ヲ變シテ大阪ニ從フ者アラン。是其力ヲ不レ借トモ。カヽル習關東ノ師相猜テ。戰必ス務ヘカラス。虛ヲ見釁ヲ窺ヒ心ヲ一ニシ力ヲ勠テ。大ニ擧テ合戰ヲ遂ハ。東師ヲ百里ノ外ニ追卻ン事。掌ヲ指カ如クナラン。寔ニ我軍ヲ全シテ。敵ノ軍ヲ挫ノ奇籌ニ非ヤ。汝我志ヲ繼テ大阪ニ籠リ。以レ此理一人ニ說トモ。修理主馬カ徒。兵術不鍛錬ノ者ナレハ。聽用ヘカラサル事必セリ。方々ニ人衆ヲ分ナヲシ。名城ノ要地ヲ離レ。無謀ノ戰ヲ好ミ。自滅亡ヲ求ン。汝以後ヲ見ヨト云ケルカ。果シテ其言ニ忤サリキ。

關原之役。眞田昌幸自其邑上田。擧レ兵遙應西軍。會台

篇首一段原文所無取諸他書以補之前後始覺完好學者不可不知此訣

德公山道帥師而西。昌幸壅河上流。誘至城下。擊大破之。公兵不能進者三日。既而西軍戰敗。石田三成以下。首建異謀者皆誅。昌幸長子信幸固爲父請得宥。昌幸遂以身退入于高野山。居常與次子幸村圍碁。以爲娛樂。意實習行陣也。及疾病。嘆曰。吁。吾夙蓄一計。今不幸遭疾。罔之能舉。吾已矣。幸村曰。願得聞之。昌幸曰。是非汝所及也。幸村愀然曰。大人固知兒無能爲。兒豈得强請遺訓。獨愧躬不逮耳。意恨甚。昌幸曰。汝何至于此。顧汝年少。雖有奇策。人無之信也。然吾亦安得斬而不言。居吾語。汝不出三年。東西且交兵。大坂必招我。我乃乞兵二萬。扼東軍於青野原。汝知之乎。幸村熟思久之曰。非有城池之固。山河之險。四隣諸侯亦無有援我者。徒提烏合之兵。衆亦不過二萬。以能拒十倍於我之勍敵。非兒所知也。昌幸曰。然吾亦無之能禦也。然我之善於用兵。內府所知也。內府聞吾督兵要於道路。雖有數十萬之衆。未必遽來爭鋒。其擁兵踟躕。不能不曠三五日。吾密使人伺其動靜。從收兵退。毀勢多橋守之。亦經數日。我以虛聲拄東軍。前後十餘日。則關西諸侯依違觀望者。多引兵歸於我。我統其衆。必得七八萬。因燒二條城。入保大坂。栅于城外。頒兵堅守。嚴法令。謹斥候。以逸

待勞。曠日持久。令數十萬之衆。頓於堅城之下。肆而不應。犯而不校。既復因其稍怠。時出兵而劫之。多方以誤之。我兵益振。而東軍神疲意倦。糧食又竭。必大興其衆。百道來攻。吾則乘城拒之。從以弓銃。皆莫不命中。東軍死傷。日就耗竭。吾又發間使。齎書招東西諸侯。其屬東軍者。亦思大閤舊誼。稍稍送欵於我。如此。我雖未能收諸侯而有之。東軍互相猜防。無有固志。於是乎。蒐兵秣馬。觀釁而起。一戰取捷。却東軍于千里之外。猶視諸掌矣。夫覆敵而不損我兵。豈非計之善者乎。吾死之後。汝入大坂。若大野兄弟皆不習兵。汝雖以是告之。必不汝聽。不過分兵遠出。强戰以取覆亡耳。汝識之。他日必有思於吾言矣。及大坂兵起。果如其言。

二三　小笠原忠政之臣高田又兵衛武功之事

寛永十四年十一月。肥前島原耶蘇ノ賊起テ。有馬ノ古城ニ據テ叛時。小笠原右近將監忠政ノ從臣。高田又兵衛功アリ。アル時賊夜討ス。夕炊過テ後暮ニ及テ。飯ヲ炊ト見ヘテ。烟多ク立リ。由茲高田夜討アラン事ヲ測知テ。豫備ヘタリ。是故ニ少モ不躁動。十五年ノ春。又鍋島信濃守勝茂。明日城ヲ攻ン事ヲ察ス。イカニトイエハ。勝茂ノ陣所毎朝旗ノ霜ヲ拂テ立直スヲ。其曉シカシタリ。サルニ依テ心ガケ。明日群ヲ拔テ城ニノリ。首七ツ取ル。トラバイカホドモ取ベケレトモ。其後ハ不取ト語レリ。

寛永十四年冬十一月。耶蘇賊起。保於有馬舊墟。諸侯討之。小笠原忠政臣。高田又兵衛。屢建殊功。望見城上薄暮烟起。知賊必以夜來襲。益嚴守備。已而賊果至。軍中略無驚擾。明年春城陷。又兵衛又先登獲首七級。先是鍋島勝茂營。每旦拂旗上霜更樹之。是日天未明又如此。又兵衛知其欲急攻城。挺身而進。果有是功。語人曰。吾猶得多斬首虜。然止不復取也。

二四　原田伊豫於肥前島原軍功之事

同耶蘇賊起ル時。寺澤兵庫頭。其臣原田伊豫。並河九兵衛ニ令シテ。唐津ヨリ赴天草村民ノ人質ヲ取テ賊ヲ鎮シム。原田並河共ニ祿千石。天草ニ著時。松倉長門守ノ居城島原ヲ取ントシタル賊等。長州ノ兵ニ強ク捍ガレテ取得ス。肥後ノ富岡ノ城ヲ取ントテ。賊六千人小船ニ乘テ天草ニ來ル。原田並河本土ニテ行逢タリ。唐津ノ兵士不意ニ遭テ。人衆寡ケレハ皆賊ニ挫レテ敗亂シ。多ハ船ニテマツ此地ヲ引退ク。原田六千人ノ賊ヲ引受。本土ト富岡トノ間五里ノ道ヲ。十一月十四日ノ辰ヨリ申マテ。且戰且卻。賊ニ敗ラレスシテ。富岡ノ城ニ入事ヲ得タリ。原田カ差物茜ノシナヒニ。鉛子七ツ中ル。八ツメハ竿ニ中リテ半ヨリ折レケレハ。絹ヲ取テ腰ニ插ム。此ニテ原田ニ從フ兵士鬪死スル者九人。古橋權大夫衆ニ拔テ。佛坂ニテ蹈トメ賊ヲ突タテタル勇勢目ヲ驚ス。原田ハ古ノ原田カ末葉也。其被官筋ノ士トモ。腰兵粮ヲ付テ來從フ

者五十餘人。原田カ前ニ立塞リテ力戰ス。賊此等ニ討レタル者多シ。是年來原田カ俸米ヲ受タルニ非ス。又原田招之然ルニ非ス。節義ヲ闕サル筑紫士ノ風俗如此。原田城ヲ巡リ士卒ヲ勵シテ。守備ヲ固ス。船ニテ引退タル者。並河多左衞門ヲ始。原田ニ以使。此城ヲ可保ヤ否ヤト云ヤリケレハ。原田速ニ城ニ不入シテ。船ヨリノ使不得其意。城ヲ守ノ評議。使ノ口上ニ可決ヤトノ返答也。此言ニ恥シメラレテ。皆城ニ來ル。原田衆中ニ向テ。戌將三宅藤兵衞ハ。吾未タ此ニ到ラサルサキニ。城ヲ棄テ逃亡セリ。並河九兵衞ハ討死シリトモ云。鐵炮ニ中リテ創ヲ病リトモ云。イツレニシテモ憑ムヘカラス。吾君命ヲ受テ此賊ヲ鎭ントス。存生ノ中ニ可退ノ理ナシ。各唐津ニ歸ラレハ。吾此城ヲ死所ト定タル旨ヲ傳ヘラレヨトテ。其

詞ヲ紙面ニ書テ。判ヲスヘテ出ス。皆原田カ義ニ感シテ。其紙ニ連判シテ。同ク誓テ守ント云。我々持ニテ將ナキ時ハ謀一決セシ。誰ヲカ將トセント云ニ。年比ト云家高ト云。殊ニ今日ノ働拔群ナレハトテ。原田ヲ推テ將トス。原田晝ハ士ヲ勞テ義ヲ勸メ。夜ハ卒ヲ戒テ怠ヲ匡ス。賊十九日ニ城ヲ攻ントス。簡ニ書テ濠邊ニ立置タリ。其期ニ至テ。竹束ヲ被キツレテ攻近ク。鐵炮ヲ放テ拒之トモ。竹束透ラス。原田諸手ニ以使番。種島ヲ五十挺ハカリヲ聚。一所ヲ目當トシテ連發セシム。乍竹束ヲ打破テ賊大ニ崩タリ。此時原田カ二士主馬又八等大手ノ門外ノ石垣際ニテ賊ト鎗ヲ合ス。澤木七郎兵衞。竹束ヲ打破リタル勢ニ乘テ。聲ヲ揚テ。搦手ヨリ突テ出レハ。主馬又八等愈力ヲ得テ百餘人ヲ擊捕タリ。賊又廿二日ニ城ヲ圍テ攻

ル處ヲ。八十餘人ヲ斬テ。城兵ノ死スル者ナシ。於レ是賊城ノ固メ不レ可レ拔事ヲ知テ。有馬ノ古城ニ據ントテ。二十三日ノ未明ニ引退ク。原田賊ノ陣ヲ遙ニ見テ。其形氣ヲ察シ。賊ハ引退クソ擊留ヨトテ。城門ヲ開キテ追ツメ。三十餘人ノ首ヲ獲タリ。城ニ入タル者俄事ナレハ。鼻紙ニ事カキタリ。原田我聞置タル事アリト云テ。カラ紙ヲ破リテ見レハ其中皆鼻紙ナリ。取出シテ配レ之。是寺澤志摩守廣高ノ爲所ナリ。賊十九日ニ敗レテ。廿一日ノ暮。大工小屋ニ失火アリテ。城中遽躁ク。兼テ火消ノ役人ヲ二與定メ置タレバ。當番ノ者カケ付ル。原田使ヲ諸手ニ走テ。僞テ此大工小屋ハ。賊火矢ヲ射ン時。燒草ト成ヘケレハ燒捨サセ候ヌ。始ヨリ各ニモ可レ申ヲ。不念ニテ不レ告候。別事ナシ鎭ラレ候ヘト云セケレハ。サソアルラントテ鎭リヌ。原田見メクラスニ一僕アリ。アノ者捕ヘヨト下知シテ。捉サセテ懷中ヲ探レハ。火ウチツケ木アリ。城中ニ在ナカラ賊ニ心ヲ通ル者ナリ。餘人ハ氣モ付サルニ。原田何ト見トカメテ知タルソト奇レ之。一言ノ謀ニテ躁動ヲ鎭事。寔ニ卒ニ應スルノ知アリ。賊亡テ後。並河三郎兵衛。今度兵士ノ勇恇ヲ論シテ。或ハ逐斥賞罰ヲ行ニ。兵庫頭愚味ニシテ。並河ニ任ケレハ。鼠負ノ沙汰トナリテ。賞罰多ハ顚倒ス。原田ハ並河カ權威ニ不レ諛ニ由テ。大ナル殊功ヲ立タレトモ。サマテソ褒美ナシ。由レ茲諸士原田ヲ推立テ。軍功ヲ論セントス。原田古ヨリ家中二ツニワレテ相爭者。主人ノ家無レ恙ハ少シ。不レ省レ之ハ不義ニ候。於レ吾ハ屈辱ヲ忍テ。喰嚥スルノミソト諫ト、メケレハ。皆憤ヲ抑ヘテ已ヌ。時過テ後。原田ハ事ヲ他ニ託テ。暇ヲ請テ唐

津ヲサル。原田カ如キハ。亂ル、時ノ良將。治ル時ノ忠臣ト謂ヘシ。

耶蘇賊之起也。寺澤兵庫頭。自其邑唐津。使原田伊豫並河九兵衛援天草。皆食祿千石。初至且悉收村民質勿得從逆。先是。賊攻島原。欲奪爲根據。島原爲松倉長門守封邑。發兵擊卻之。於是。賊六千人轉襲天草。欲拔富岡據之。原田等遇之本土。衆寡不敵。兵多潰散。並河多左衛門以下。皆乘舟逃去。原田獨留戰。銃丸集于背旗者七。又中其竿。竿折。原田乃取旗扱之帶。部下士死者九人。且戰且退。至佛坂。古橋權大夫反戰陷陣。賊衆

雜墨淋漓無冗語

皆靡。初原田之先爲西州大族。其遺臣在近邑者五十餘人。裹糧而至。爭以身蔽原田。力戰。賊多死。本土距富岡五十里。原田沿道扼賊。自辰至申。遂得入富岡。時十一月十四日也。已而並河等使使問城可守否。原田曰。公等不速來面與議。此豈使人往復所能決乎。使還報。並河等大愧。相率入城。原田謂衆曰。戍主三宅藤兵衛方我未至。棄城而逃。並河九兵衛爲賊所擊殺。或傳其被創而病。皆不足與有爲也。吾奉命討賊。要據城戰死耳。公等能得脫歸。幸爲報之我君。因作書押字以視。衆皆感激。以次錄名姓於紙尾。誓與俱守城。且曰。若人自

爲戰。何能有濟。議以一人帥之。衆皆推原田。遂立爲將。會賊就濠上。榜十九日攻城。原田益嚴守備。督勵士卒。將以忠義。及期賊果至。擁束竹以進。城上發銃皆不入。原田令五十餘人齊發。丸皆聚於一處。遂得摧束竹。賊大擾亂。原田臣主馬又八二人。執槍與賊戰於崖下。澤木七郎兵。自後門大呼突出。主馬又八勢益振。斬首虜百餘級。廿二日賊又來攻。復擊破之。斬獲八十餘而城兵無死者。賊知城中有備。廿三日黎明拔營引去。原田追擊。復得三十餘級。初入城。士皆苦無紙。原田曰。吾聞先君嘗備之久矣。令破障。中皆裝以白紙。盡取以給士。已破賊。越二日天暝。工場火起。舉城騷擾。原田令徧徇曰。此虞賊火箭。故豫火之耳。衆卽定。嘗巡城見一卒命縛之。果懷燧具。蓋爲賊間者也。衆莫不服其機敏。及賊平。論功行賞。兵庫頭昏懦。委之權臣並河三郎兵。原田素不肯諂事並河。以故賞不酬勞。衆皆怒。欲爲原田訟。原田不聽。曰。爲人臣。植黨忿爭。少有不禍國者。吾寧淵默忍詬而已。衆不得已從之。後託他事致仕而去。

二五　本多正信和君臣事

源君怒ヲ侍臣ヲ詈玉フ時。本多正信聞ヲ之御前ニ出テ。殿ハ何ニカ腹立セラル、トイヘバ。源君御口ニ沫ヲ嚙セ

ラレテ。斯々ノ事有ト仰セラル、ニ。正信誠ニ殿ノ理也。ヤア汝何ゾ如此ノ破家ヲ盡スヤト云テ。傍ヨリ詈之源君ヨリ甚シ。正信ハ源君モ老祖ト稱セラレテ。名ヲ稱セラレヌ程ノ人ナレバ。首ヲ低テトカクヲ不言。源君却テ詞モナク。笑止ニ思召ス御心出來テ。火氣モ稍シヅマリシ時。ヤア汝不心得ニテ詈セラル、トナ思ヒゾ。是汝ニ御教訓也。イカニトナレバ。タハコトヲ言テ巷ヲ過ル者ハ。心ニモカ、ラズ。是本ヨリ疎ガ故ナリ。其タワ言ノ半分我甥子ニアラバ。怒リ責ル事少カラシ。是本ヨリ親カ故也。サレバ汝ヲ人ガマシクモ。召使レントノ御心ニテ斯ハ仰ラル、ゾ。汝ガ祖父ソレノ合戰ニ。箇樣ノ武功アリ。汝カ父ソレノ城攻ニ。カヤウノ忠義アリ。殿此事御失念アルベキヤト。祖父ノハタラキヲ云立レバ。源君聞召テ實モト思召當ル色ヲ察シテ。ヤア汝一旦ノ御意ニ違タルヲ憚カルベカラズ。怒レバ火氣ノボル。火氣ノボレバ咽乾ク者ナリ。御茶ヲ點シテ持參テ奉トイヘバ。彼者御茶ヲ奉ル。源君取テ召上ラル、。ヤア汝今日ヨリ愈進テ奉公ヲ勤ヨ。少モ氣ヲ屈セザレ。殿サ思召ゾトイヘバ。源君怒リヲノヅカラ解ヌ。正信世ヲ終マデ。御前ヲ黜ラレ閉門シタル近習ノ士ナシ。

東照公嘗有憤侍臣。罵詈極口。本多正信入見曰。君何賜罪責之深。敢問何故。公色艴然口正沫出曰。彼適云云。所以怒也。正信曰。君言誠有理。因顧侍臣曰。汝何惷如此。又從罵之甚於公。正信齒已高。公嘗曰。老祖不名。

東照公忿嫉侍臣與夫本多侯拮据營救之狀紛然滿紙使人如親見之文節先生嘗論彼事之方曰有過而取之者蓋此類也

見敬禮如此故其罵侍臣侍臣俯席唯謹而已公亦默然意頗悔往之過于罵也已而正信候公色稍和又謂侍臣曰我君之憤汝是教誨汝也汝勿以君之不貸於汝今有狂言慢語過巷聞之者漠然絕不與己相關無他疏之也或有己子若姪如此顧狂慢未必至其半猶且甚怒而讓之無他戚之也遂又盛稱其父祖曰乃祖有某功伐乃考有某忠烈我君豈忘之故其憤汝欲汝能成立足供驅使耳公意亦以爲信然由是怒益解正信又曰汝勿以纖介之忤旨自沮而難於趨承夫人怒則火上而中乾汝急點茶以進侍臣如其言公卽擧茶甌一啜正信又曰汝今後宜益勤於奉公愼勿負恩厚我公固欲汝如此也語畢公色益溫視侍臣無復介意正信常能因事勸解率此類以故終其世近侍之臣無有獲罪屏黜者

二六　安藤帶刀忠義篤厚之事

源君同ク召使ハレタル人皆一萬石ヲ賜ハリタル中ニ安藤帶刀直次ノミ横須賀五千石ヲ賜リヌ源君均ク是一萬石ナリト思召誤テノ事也十年餘ヲ過テ成瀨安藤等御前ニ伺候スル次デニ汝等面々一萬石ノ領知ヲ與ヌ仕置法度イカヾスルゾト御尋アリ成瀨臣等皆一萬石ナリ安藤ハタヾ五千石也ト白ス源君驚カセ玉ヒテ

余以横須賀實ニ一萬石ト思ヘリ。汝成瀨等ト俱ニ扈從勤仕シ。武功ヲ累テ所與ノ祿ナリ。何ゾ多少ヲ分タンヤ。汝色ニモ顯サズ詞ニモ出サズ。不怨不慍シテ今日ニ至ル。奥深恥シキ心底ナリ。篤厚ノ至リ。忠義ノ誠ト謂ツベシトテ。於此五千石十餘年ノ米穀ヲ積テ。一度ニ下シ賜リヌ。總テ算之ハ。所納四五萬石ニ及ベリ。由茲直次ノ家豐饒ナリ。

東照公頒侍臣邑皆萬石。獨安藤直次封横須賀。租額五千石。經十餘歲。直次與其僚同侍。公從容問曰。汝等皆享萬石之封。蒞民爲治。自當有善政在。盍爲我言之。成瀨進曰。臣等皆叨恩厚。得受大邑。獨直次之封得其半耳。公驚曰。吾以横須賀爲萬石之邑。卽不能萬石乎。因顧直次曰。汝與成瀨等。積扈衛之勞。同顯功伐。頒祿豈得有多寡。汝至今曾無幾微露於辭色。忠義之厚。我深有愧於汝。於是。併十餘歲之入賜之。所獲蓋四五萬石。直次由是暴饒於財。

讀書如此古人無能遁其情假令東照公聞之未必不含笑首肯也

野史氏曰。東照公至性濬哲。蒞事不苟。況考之圖籍。以頒爵邑。寧復有如此之疎虞也。蓋公素欲以安藤侯傅公子。以其禮秩頗遜於儕輩。或不能無觖望。於是特減其封以驗忠否。經十餘歲之久。果知其忠誠足賴。後遂以傅紀公子。公之謀蓋決於十年之前也。

二七　福島左衛門大夫正則左遷之事

福島左衛門大夫正則安藝備後ヲ召放タレ。信濃ノ川中島四萬石ニテ。左遷セラル、時。正則江戸ノ屋敷ノ四方ヲ透間ナク圍テ。若異儀ニ及バヾ。忽擊ツヾサントス。此時巷說區ナレバ。カケ落シタル者多シ。恥アル士ダニ如此ナレバ。下僕ハ皆行方シラズナリヌ。後藤木工兵衛。熊澤半右衛門等。汲炊ヲ務メテ膳ヲ具フ。正則切齒テ鬪死セント欲ス。熊澤諫テ曰。臣等御供申テ突テ出タリトモ。ヨキ敵ニモ遭ガタカラン。タヾ雜卒ノ手ニカヽリテ。見苦キ死ヲセサセラレバ。武將沒後ノ玭タルベシ。臣等直膚ニテ腹切ヨリ外ニ道アルベカラズト。正則怒ヲ抑ヘテ從之。然ル所ニ墨付ヲ以テ廣島ノ城ヲ子細ナク渡サル、ニ由テ。死ヲ宥ラレヌ。

林新右衛門ト云者アリ。正則ノ息女ノ傅ナリ。正則ノ前ニ出テ。圍者亂入候ハヾ。早ク御自害可然候。拙臣此ニ候ヘバ。奥方ノ事ハ御心ヲ煩サルベカラズ。御介借仕リ。皺腹ヲ割テ殿閣ニ火ヲ放ナ。跡マテ人口ニ毀ラレザルヤウニ可仕候ト云。後京師ノ傍ニ幽居ス。右ノ義ヲ高シトシテ。以豐祿招ク大名アリ。林承引セズ。我年七旬ニ餘候ヘハ。今ハ世ニ望ミナシ。殊ニ召出サレントノ事ハ。正則身上相果候時ノ一事ニ由テ也。サシテ義ヲ守リタルト申ホドノ事ニ非ス。縱拔群ノ功ニモセヨ。老體手足進退不自由ノ身ニテ。一本鎗ノ者。明日何事アリトテモ。若武者トモニハ遙ノ劣リニテ候。然ニ高知ヲ貪テ。徵命ニ從バ我心ヲ欺ニテ候トテ。終ニ仕ヲ不求。友人諫之テ。所言ハ尤ナレトモ。一ツハ子

息ノ爲ヲモ顧ラレヨト云。林我子供ノ爲ヲ顧ル事人ニ異ナリ。身ニ應セヌ高知ヲ取ハ耻ヲ招クノ本ナリ。人ノ禍是ヨリ生スル事アリ。位牌知行ヲ取セテ。分ニ過タリナド人ノ口ニカケンハ。子ヲ愛スルノ道ト云ヘカラス。其上我浪人ユヘ。子共小知ニテ各主君アリ。立身ノ爲ニ暇ヲ請センモ。大ナル貪欲ナリ。人皆命分アリ。禍福ハ人意ヲ以テ奈何トモスベカラスト云テ不レ從林タヾ危ヲ見テ致レ命ノミナラス。能義理ニ通セリ。誠ニ此ヲ俊傑ノ士ト謂サルヘケンヤ。

福島正則有レ罪國除。更賜二川中島四萬石一。正則時在二江都一。幕府發レ兵圍二其邸一數匝。或有レ逆レ命。將レ討二滅之一。於是正則臣庶多亡。獨後藤李兵熊澤半右。躬爨以進レ食。正則憤懣。欲二出鬪而死一。半右諫曰。君欲二出戰一。臣等亦從力鬪。顧不レ得レ遇二良士一。與レ決レ死。徒辱二于卒伍之手一。無レ爲也。事既至レ此。臣等唯有二引決一耳。正則不レ得レ已從レ之。先是。正則臣留守二廣島一者。或欲レ無レ致レ城。幕府命二正則一馳書慰諭。遂致城而去。正則由レ是獲レ宥。尋遷二川中島一。初林新右傅女公子。謂二正則一曰。卽及レ于レ戰。君速自爲レ計。夫人亦殉焉。臣請得レ相レ之。從縱レ火於宮。臣亦剜レ腹而死。不レ復遺レ累於異日。幸勿以爲レ慮。正則已得レ解。新右亦罷仕入レ京。負レ郭幽居。久之。諸侯或高二其義一。聘以重祿。新右曰。吾年七十無復意於人間。且今之辱命者。以舊君在レ厄時。謬有二一言輔

筆力遒勁真足副林子壁立千仞之氣

其進止而已此亦臣子之分寧足以籍口卽使當時有超世之功今已癃老舉止猶艱若一旦緩急爭功一槍不復若少壯之士遠甚矣自知不可用猶抗顏弋取利祿是自欺也其友曰子言固善矣獨不爲子孫地乎新右曰吾之愛子與人異夫寵祿之過禍之本也使子孫懷尸素之恥爲人所毀笑非所以愛之也且吾久退休然兒曹幸皆就仕稍得自贍吾若濫叨重祿使兒曹辭其君更承我後豈非貪婪之甚乎人生自有定分富貴非人所能爲也遂辭不就

野史氏曰自東照公修霸業開府於東海歷世相承天子寄以邦家之重生殺與奪率出其意廼如福島侯之失封要獲罪於霸府非獲罪於天子今乃書曰有罪者何耶夫天子既寄霸府以生殺與奪之權故其有討於四方輒曰吾討有罪以鎭天子之邦此其有罪云者豈非爲梗於天子之邦乎爲梗於天子之邦斯獲罪於天子矣蓋霸府每以此駕御一世而天下罔敢違忤抑亦出於勢之不得已也且也侯初從豐大閤而興及大閤薨更以兵屬東照公關原之役首履戎行以建殊勳東照公亦多裂地封之以酬德也顧侯之致力於關原特以與大坂用事者不協初

非叛大坂也。非特不叛大坂。其輸誠於大坂。始終不渝。幸天下有變。欲以報大閤舊誼焉。東照公以其如此。意蓋以爲。侯與加藤侯。終非爲我用者。於是。後世猶奉公遺旨。遂皆因事罪之。加藤侯一傳失封。侯則及身失之。蓋侯性剛烈。其蒞民。或不能無失於撫御。若夫加藤侯。夙耀威於異域。加以治邦經野。遺澤施于無窮。最有足貴者。而其歿也。當時猶疑非良死。及嗣侯代立。稍又失封。至今天下莫知其爲何罪焉。然則。霸府之於二侯。謂之討有罪公也。所以討之者私也。儻質之大史氏。必有能定之功罪。大書特書。以表章於百世。今則姑從實記之。而得失之跡。冀亦可得而明也。

二八　藤堂高虎世々補先手事

藤堂佐渡守高虎。一ノ箱ヲ造テ書院ニ置。領國伊賀伊勢ノ士。殉死セントト欲ル者ハ。姓名ヲ記テ此箱ノ中ニ入ヨトアリケルニ。簡ヲ箱ノ中ニ入ル者四十餘人アリ。其後駿府ニテモ亦如此スルニ。三十餘人アリ。高虎此簡ヲ持テ登城シ。臣ガ家人皆カヤウニ候。是臣ガ子孫ノ代マテモ御先ヲ承ン時。御用ニ立者共ニ候。願クハ以上意サシ止候ハントテ。源君ノ御目ニカケ。宿所ニ歸テカク思ヒ入タル上ハ。殉死モ同事ナリ。源君ノ嚴命違ガタシ。必ズ思ヒ止レト堅ク制セラレケルニ。

一人右ノ腕ニ手ヲ負ヲ不具ナル者アリ。如此ナル身ニ候間。臣ハ別義ヲ以テ御免ヲ可蒙ト云。源君聞召レ。和泉我世々ノ先手也。下知ニ忤テ強テ殉死セントイハヽ。和泉ガ先手ヲ取アグヘシトノ上意ニ依テ。彼者此上ハトテ止ヌ。高虎ノ先手此事ヨリ始レリ。アル時高虎源君ノ御坐アリケル所ノ障子ヲ隔。土井大炊頭利勝ニ對シテ。我年老ヌ我死セハ我子大學頭不肖ナリ。大事ノ地ニテ候間速ニ國替ヲ仰付ラレテ。可然候トソ語ラレケル。利勝卽台聽ニ達セラル。源君高虎ヲ召テ。其故ヲ御尋アリ。高虎伊賀ハ上國ニテ。而モ國人勇氣ナリ。舟ニ乘テ大和川ヲ下レバ。夜中ニ人不知シテ大阪ニ到ル。伊勢ハ近江山城ニ隣テ。是又大阪ニ師ヲ出スニ便アル地ナリ。カヽル國ヲ不肖ノ子ニ傳ヘ

候ハン事心モトナク候。上意ヲ承リテ死セバ安堵可仕トテ。國ノ繪圖ヲ出サレケルヲ。源君具ニ御覽セラレテ。是他人ヲ封ゼン國ニ非ス。彼殉死セント謂シ。二心ナキ者ドモニ守ラセバ。何ソ思ヒヲ勞スル事アラン。代々伊賀ヲ不可易ト仰セラル。

極力模寫而將之以婉曲如見藤堂侯肺腑文簡先生又嘗曰有迫而映之者蓋此類也

藤堂高虎封伊賀伊勢。嘗置一篋于廳事。令其臣曰。欲殉者投刺篋中。於是。投刺者四十餘人。後在駿府亦如此。復獲三十餘人。高虎乃齎篋入見東照公曰。臣諸臣許臣以死者。如此其衆也。若以君之靈。臣死之後。兒輩仍得充前列。以此衆戰。亦足扞一面。願得以公命止勿殉。因以刺進。公命如其言。高虎退屬投刺者。告曰。汝等

懷此忠誠。吾意與已殉無異。且內府嚴命不可背也。汝等止勿復云殉。有一人毀傷右腕者。進曰。臣肢體如此。願特得見許。事聞。公曰和泉世爲我先鋒。今廼敢爾忤我。必罷和泉勿復置前列。於是。其人亦不得已奉命。藤堂氏世爲大軍先鋒。實自此始矣。後數歲。高虎在公宮。與土井利勝語。距公在所。隔一紙障而已。高虎曰。吾老矣。一旦先朝露。兒子不肖。不可居要地。願得及吾猶在。移封他邑。利勝以聞。公召高虎問其故。高虎曰。伊賀土地沃饒。其民亦勇悍。若乘舟下大和河。一夕得達大坂。伊勢亦與近江山城接界。出兵大坂。頗爲便近。二州皆形勝之地。不可使豚犬守之。若得移封之命。而死臣之願也。乃出圖以獻。公汎覽久之。曰。此不可以屬他人。使往欲殉者守之。不亦善乎。吾與汝約。世世勿渝是命。

二九　上野郡主重長之臣月岡左門

忠義之事

上野ニ重長ト云郡主アリ。六萬石ヲ領ス。上杉憲政ノ師ト相戰。衆寡敵シカタキ故ニ降參ス。憲政重長ヲ春日門ノ內ニ固ク閉コメラ國ニ歸サス。重長落髮シテ自雲林院ト號ス。憲政聞之テ。雲林ハ其高シテ不可及ノ義ヲフクム者ナラント云テ大ニ怒之。重長嘆息シテ付從フ者ドモニ對シテ。吾此門ニ死ナンカ。兼テカ、ルベシト

シラバ。大軍ニ向テ戰場ノ白骨トナリ。降虜ノ耻ヲハ受ジ者ヲ。千悔靡レ逮ト云テ涙ヲ流サル。月岡左門ト云者。美童ノ時ヨリ寵セラレテ。此時三十歳バカリ。斯ル處マデ離レサリシガ。君公一度遁歸テ。今ノ鬱憤ヲ散セントダニオホシメサバ。臣ニ一ツノ謀ノ候。御承引候ハンヤ否ヤトイヘバ。重長何ナル妙策ゾト問ル、ニ。月岡自殺仕ルベシ。首ヲサキニ持セ。戸骸ト稱シテ。君公藁筵ノ中ニ入セタマヒテ。血ヲ滴テ藁筵ニ注ギ。御使ヲ立ラレテ門監ニ示シ。君公閉錮ノ中憂苦ノ餘リニ氣狂シ神亂無罪ニ侍臣月岡左門ヲ手刃シテ斬殺シ候ヌ。戸骸ヲ山野ニ埋ミ候ハント申サバ。君公輙ク此門ヲ遁レ出サセラレテ御本意ヲ達セラルベシト。重長打笑テ否吾徒ニ戲言ノミ。アルベクモナシトテ。復言ニ出サレズ。其夜月岡一封書ヲ殘テ自殺シヌ。緘ヲ開テ見之ハ。勇士ハ詞ヲ違ヘヌ習ニ候。御止候ラ止ルホドナラバ。何ゾ言ニ出シ候ハンヤ。今自殺仕ル志。敵ニ遇ヒ刃ヲ蹈テ死スルト忠義不異候。迂濶ニ似候ヘドモ。通例ノ事ニテ遁出サセラルベキ道ナシ。此上ハ枉テ臣カ謀ヲ御用候ヘトゾ書ニケル。重長讀モ果サズ涕泣シテ。鐵石ノ士トハ斯ル者ヲゾ云ベキ。是ヲ捨ヲカバ其志ヲ空スル也。イザ、ラバトテ。月岡ガ謀ニ任セ。老臣ヲ使者トシテ。カクト理リケルニ。門監東條左近。老臣ニ向テ常ニ月岡氏ノ高義ヲ承リ及候。誠ニ藁筵ノ中ヲ一鎗撞テ後門ヲ出シ候ヘシ。不然ハエコソ出シ申マシケレ。藁筵ノ中ハ是重長殿ナラン。月岡氏ノ死骸ニアラシト云ケレバ。老臣大ニ氣色ヲカヘ。是ハ御詞トモ覺ヘヌ事ヲ承ル者カナ。月岡死セリトイヘ

ドモ。眼前我等カ傍輩ニ候。何ゾ以鎗撞セ可申ヤ。貴殿如斯ナラン時。人ニ撞事ヲ許サルベキヤ。出サレズハ出サレザルニテ可已ト怒リケレバ。左近笑テ。貴殿ハ寔ニ器量辨才ヲ兼タル人ナリ。月岡氏ノ勇貴殿ノ智ヲ以テ。臣トシテ其君此極ニ遭セラレタル事ハ豈非天ヤ。貴殿ノ言尤理ニ服シ候ヘドモ。聊思慮スル所ノ候間。叶マシク候トテ出サヽリケレバ。老臣空ク歸レリ。左近夜ニ入テ潛ニ來リテ老臣ニ對面シテ。今日ノ事ハ各其當ル所ノ義ニ候ヘハ。俱ニ怨ミアルベカラス。然レドモ月岡氏無類ノ忠盡ヲ徒ニナシ果ンモ。黄泉ノ憤リサソ解ガタカラント愴マシク候。明朝別人ト番ヲ代リ候間。又前ノ謀ヲ用テ御覽アレトイヘバ。老臣何ノ謀カ候ヘキ月岡カ死骸ハ御門ノ中ニ可葬理ナシ。腐臭ハ猶見ルニ不可忍候。出サル、ニ於テハ。野原山陰ニ埋マント存ル也ト。サリゲナク云ナシケル。左近吾等腹心ヲ顯シ候ニ。貴殿何ソ度サレ候ヤ。サレドモ貴殿ニ在テハ。如此ナルヘキノミト云捨テ歸ル。老臣明日又前日ノ如クシテ。重長終ニ春日門ヲ遁出テ。國ニ歸ル事ヲ得タリ。

上野豪帥有重長者。食邑六萬石。屢與上杉憲政戰。衆寡不敵。遂降。憲政囚諸春日門。久之。重長剃髮自號雲林院。憲政聞之怒曰。雲林豈謂其不可及乎。置守益嚴。重長與諸臣語。歎曰。嗚呼吾死于此。蚤知其如此。寧如力戰橫尸行陣。謀之不減。終身爲囚虜。悔將何及。因泣數行下。有月岡左門。成童爲重長所愛幸。至此三十許

歲謂重長曰君欲脫厄臣願得進一計重長曰如何曰臣請自盡君因使使以元視監門君亦以藁席自盛汚之以血詐監門曰君悒欝成疾喜怒不常手及臣某請葬之外君因得脫出以爲後圖重長笑曰我特戲之耳遂不復言是夜左門自殺以書告重長曰臣聞勇者耻不踐其言臣已以死許君君雖有命寧得苟免且臣固知非詭道不可以免難臣死之後君願如臣計重長泫然流涕曰此所謂義貫金石者吾豈得棄其言不用哉遣長臣告監門東條左近如月岡計左近曰僕聞月岡子之高義久矣顧藁席中得無非異人乎願得以槍一鏦而後聽命使者作色曰吾子何至于此夫月岡雖死我友也設令子與我易地亦可使人得鏦其屍乎不見許出則已吾豈得由是辱我友也左近笑曰吾子才識如此加以口辨噫有子之才與月岡子之勇猶不能脫君於厄豈非命乎雖然吾亦我君之事也不可以私吾子不聽長臣亦無以强也至夜左近潛來謂長臣曰今日之言各爲其主幸勿以爲恨抑僕亦不忍使月岡子之死無裨於子君明日他人代監門請復試以前計長臣曰吾豈懷詐者門中不可以瘞屍吾又不忍見其腐臭故欲葬之山林耳何前計之謂左近曰吾披露肝膽

如此。予何隱之深也。雖然予之隱亦宜耳。遂去。明日長臣又如東條言。重長遂得脫歸其邑。

三〇　毛利元就諫大內義隆事

大內義隆ハ周防長門豐前全州ヲ領ス。安藝石見ノ國士皆屬之。太宰ノ大貳ヲ兼タル故ニ。筑前其令ニ從ヘリ。周防ノ山口城ニ居テ威ヲ西國ニ振フ。其比類少キ大家ニテ。可懼者無リケレハ漸ク武備ニ怠リテ遊宴ヲ事トス。茶ノ湯歌ノ會ニ日ヲ送リ。文道ヲ好ミテ弓馬ニ疎ク。軍事悉ク大內家ノ元臣陶尾張守晴賢ニ任セラレケレハ。晴賢懷異心ノ萠シアリ。毛利元就察之テ。アル時間ヲ求テ義隆ノ前ニ出。古ヨリ國ヲ簒候事。皆其家ノ大臣ニテ候。小身者ハ望アリテモ。ナラザル勢ニ候。然故ニ明君ハ能將士ヲ帥テ。威ヲ下ニカサズ候。下ニカス時ハ。職ヲ授ケ祿ヲ與ヘテモ。是ヲ君ヨリ出タリトセス。大臣ノ云ナシニ由レリト思ガ故ニ。其君ヲ無カ如ニシテ。大臣ノ權勢日ニ盛ナリ。サレバ國中ノ士恩ヲ得心ヲ通者多シテ。後動シカタキニ至ル。大臣モ始ヨリ私意アラバ。信用セラルベカラズ。始ハ然ラザレドモ。君味シテ。已レニ任セラルレハ。政事ノ是非諸士ノ黜陟。皆我意ヲ恣ニシテ。君ヲ不憚候。今ノ體甚危ク候間。御心ヲ付ラレ。下情ヲ審ニシ。細務ヲ知。皆自爲之テ長久ノ謀ヲ定ラレ候ヘト諫メケレドモ。義隆驚ズ。遂ニ晴賢ガ爲ニ弑セラレタリ。陶尾張守始ハ隆房ト號ス。後ニ義隆ヲ弑シテ晴賢ト改ム。

大內義隆有防長二州。治於山口。南踰海略有前豐。以

取古籍成語淘鍊出之絕不見裁緝之痕

職兼太宰大貳。前筑屬其管內。自防以東北藝石諸豪皆隸焉。境土已廣。威震遠近。自負其富强。不復以軍務嬰意。日夜會客。修茶禮嫻和歌。游燕無度。政事皆決於長臣陶晴賢。由是晴賢勢益張。毛利元就廉知其有異圖。承間諫曰。自古簒弑之禍必由大臣。若夫疎賤者雖有之無能爲也。故明主必躬親總攬。不假人以威權。威權一移。群臣必至受官於公朝。而拜恩於私門。於是視其君曾弁髦之不若。大臣已擁衆於下。根深蔕固。不可復動也。夫大臣亦非初懷逆謀。君昏無知人之鑑。已任之以政。黜陟與奪一出濟私。此無君之心所由生也。臣竊察方今之勢。甚有足慮者。願察於微言。謹於細務。有以防禍亂之源。國之福也。義隆不能用。遂爲晴賢所弑。

三一　本多忠勝之二子互被讓黃金事

本多中務少輔忠勝。病テ卒スル時。家老松平河內ニ書置ヲ渡シ。美濃守忠政ハ嫡子ナレバ。遺跡ヲ嗣事公方ノ命ノマヽ也。武具馬具茶具等ニ至ルマデ盡是ヲ美濃ニ讓ル。我黃金一萬五千兩ヲ儲ヘヲキヌ。次子出雲守忠朝ハ小身ナレバ。此黃金ヲ與ベシトノ遺言ナリ。河內此事ヲ忠政ニ白ス。忠政氣色ヲカヘテ。親ノ遺跡ハ嫡子ノ所嗣勿論也。親ノ遺物モ亦嫡子ノ所有古今同シ。縱ヒ書置タリトモ。何ゾ非理ヲ用ンヤトテ。黃金ヲ封シテ忠朝ニ與ヘズ。河內又書置ノ趣ヲ忠朝ニ白ス。忠朝我ハ小身也。金

銀ノ用廣カラズ。濃州ハ多ク士ヲ扶持シ。民ヲ賑濟ス。世ノ變アル時ハ。軍犒ノ費許多ゾヤ。中務我ヲ愛シ給フガ故ニ。如此ナレドモ。於義非所受ト云テ。黄金ヲ取心ナシ。河内以此言告忠政。忠政恥之テ皆忠朝ニ與タレドモ忠朝固辭ス。忠政ハ父ノ書置不可違ト云。忠朝ハ次子其家ノ財ヲ專ニスベカラズト云テ。兄弟互ニ相讓ラズ。一門ノ人々感之テ。黄金ヲ二ニ分テ。半ヲ忠政半ヲ忠朝ニト定ラレケレバ。忠朝マヅ其裁判ニ任セナガラ。急用アラバ時ニ當リテ可申請トテ。封ヲ不解忠政ノ倉ニ置テ身ヲ終ルマデ一金ヲモ不取。

本多忠勝疾病。以書命其大夫松平河内曰。長子忠政承我後。凡兵器及他財賄盡委之忠政。次子忠朝分封甚薄。我別畜黄金一萬五千兩。吾死宜以金與忠朝。忠勝卒。河内以書告忠政。忠政怫然曰。吾爲嫡長。先君遺寶。皆我之有也。雖有顧託。吾弟豈得專財乎。盡收金不肯與忠朝。河内以告忠朝。忠朝曰。吾爵封非崇。用度亦易給。吾兄享先君遺業。非獨賑恤臣民。一旦緩急出兵四方。費糜不貲。先君愛我。故有此命。然吾義不可受財也。忠政聞之大慙。悉以金與忠朝曰。先君之命不可違也。忠朝曰。弟不可以專父財也。兄弟相讓。久之。宗戚與謀。分金半與忠朝。忠朝不得已從之。曰。若急有所須。當請而取之。仍封寘之忠政内庫。終身不取一金。

辭氣敦厚足見次公友愛之情

三二一　寺澤志摩守廣高行跡之事

寺澤志摩守廣高ハ肥前ノ唐津肥後ノ天草兩城十二萬石ヲ領ス。毎日寅ニ起テ卯ニ至テ朝ヲ見朝ヲ見畢テ飯前ニハ必ズ馬場ニ出テ自一二匹ヲノル飯後ニハ鎗刀等ノ術ヲ學ブ。冬ハ寒三十日射ヲ能スル者ヲ召テ若キ者共ノ師範トシテ習ハシム。先自身卷藁ヲ射テ各次第ニ令射之。夏ハ土用ノ中鐵炮ノ稽古モ亦此ニ類ス。此時ハ一汁一菜ノ飯ヲ廣高モ共ニ喰テ別ニ美味ヲ不喰。夜武藝ニ遊ブトキハ粥糝ノ類是又士ト共ニス。公用國政ノ急務ナキ時ハ酉後臥床ニツク。曰ク夜ハ可寐ノ理ナリ。無用ノ夜話ニ精神ヲ疲シ明日ノ勤ニ倦事甚不可也。近習ノ者モ夜早ク休息セバ晝ノ勞劬ニ可耐ト也。在國ノ年ヨトニ國中ヲ巡テ民ノ艱苦ヲ問普請方郡方ノ奉行ニ命ジテ豫水旱ノ憂ヘヲ防シメ賦稅徭役ノ不正ヲ正ス。曰休暇ヲ賜リテ領國ニ歸ルハ遊山玩水ノ爲ニ非ズ。一年江戸ニ在テ自身領國ノ政ヲ爲訟ヲ聞事ナケレバ法度判斷モ非理アリテ士民怨謗者アランカ亂ノ端ナレバ公方モソコヲ思召ナラン。鷹野ヨ川狩ヨ茶ノ湯ヨ連歌ノ會ヨトテ讌樂ヲ先トシ政令ヲ後ニスルハ公方ノ御心ニモ忤自己ノ先務ニモ怠ルナリ。國郡ヲ巡ラザル時ハ其奉行ニ云セテ聞ノミ只聞ノミニテ見ヌ事ハ利害損益必所不盡アラント也。唐津ハ畑所ニテ麥多シ。夏五月六月ハ家中ノ下僕皆麥飯ヲ食シム。曰ク下僕ニ喰ハシメバ其主々モ喰テ可也。我モ諸士ニ下知スル上ハトテ右兩月ハ麥飯タリ。又衣類木綿タルベシトテ儉約ヲ守シム。自分モ木綿衣タリ。曰ク下ニ所令自是ニ

精錬之極使人疑據平生所記憶隨意鋪叙者

先タツヲ善トス以身教レバ。口ホネヲ不レ折シテ。下僕ヨク從フト也。凡廣高ノ行跡皆如レ此。

寺澤廣高封于唐津。天草島屬焉。租入十二萬石。每日以寅起。卯而視朝。朝罷。就埒調馬。久之終而後食。已食。擊劍盤槍以爲常。冬月小寒至大寒。令群臣子弟習射。必擇善於射者爲之師。縛藁徑數尺以爲的。躬親試射。又令子弟以次射之。夏月三伏習炮術。亦如此。是時也。與子弟同飯。不過一羹一蔬。夜間或與談兵。必作粥或糝於羹與食。平居無事。輙以下晡就寢。曰。暮夜偃息常也。若間語至夜深。徒疲神思。以妨明日之務。無爲也。且吾蚤寢。左右近侍亦遑息。得以服晝間之勞。不亦善乎。其在國。常躬按部。所至問民疾苦。命所司豫爲旱澇備務平租賦。均徭役。曰。幕府遣吾曹間歲就國。豈爲放浪山水。釣弋自恣哉。以久在都下。不復聽國政。恐有施設悖理民懷怨讟。是禍亂之源也。幕府有虞於此。以故遞次遣視政。若夫職守之不恤。而徒耽於燕樂。已非幕府所以望於吾曹。亦豈古者急先務之意哉。且不親案行。徒聽之吏。亦非所以盡民隱。審利害之實也。唐津多麥地。每歲五六月。士庶皆使婢僕食麥。廣高曰。已食婢僕以麥。爲之主者宜食之。我亦出此令。豈得獨自異。於是。

夏月每食麥下節儉之令躬著木綿衣曰率下在以躬先之苟以躬先之不須煩言而下已從之矣其勤儉蓋此類也

三三　寺澤廣高之臣池田市郎兵衛

潔白之事

寺澤廣高ノ家ニ池田市郎兵衛ト云者アリ度々ノ戰功ヲ累テ首供養シタルホドノ武士ナリシガ浪人ニテ困窮ニ及ビタル處ヲ廣高招テ茶ノ代トテ四百石ノ一村ヲ役ナシニ與ヘラル鉄炮廿人是ハ并ノ足輕ニ非ズ人スクナニテ不如意ナルベシ使レヨトテ預ケラル黑田細川家ヨリ其池田イヅクニ在トモ不知シテ廣高ニ尋トラレタル殘念ナリト云テ竊ニ以三千石招ルレドモ不行臣已ニ饑寒ニ及ブ時廣高ノ惠ヲ蒙リ今ニ至リテ妻子ヲ豐ニ育候豐祿ニヒカレテ他家ニ參ン事非義ニ候トテ不承引廣高此事ヲ泄聞テ人高知ヲ與ントイヘドモ池田利ヲ不貪シテ潔白ノ志ヲ存ス然ルヲ我知ヌ體ニテ捨置ンハ道ニ違ケリト思テ三千石ヲ與ントス池田臣ハ元ヨリ祿ノ多少ヲ不論只君ノ眷遇ノ不淺ニ由テ今所賜ノ一村衣食ノ用ニ足テ歲月ヲ送リ候毛頭此外ヲ求ル心ナシ身上不足ニ存ゼバ餓死スルトモ始ヨリ枉テハ召命ニ應ズベカラズ候當家ニ參リテヨリ何ノ功勞モナク剩御懇意ノミ積リ候ヘドモ聊報ン時到ラズ今サラ過分ノ御加增申請テ不快候若臣ガ武功ニ應ジテト思召レ候ハヾ御家ノ一老平野源右衛門八

千石下サレ候ヘドモ。臣ト同坐ニ武者雑談ハナリ申サズ候。由レ茲臣ニハ一萬石下サレテモ。猶十分ナリトハ申ガタク候ガ。中々手ヲ御ツケ候ヘバ。臣ガ仕置タル男役ニ班ツキ申候間。卻テ此マ、ナルガ忝ク候トテ。固辭シテ終ニ不レ受。池田イヅレノ所ノ戰ニカ。後殿ヲシテ引取事アリ。見知タル者。田ノ畔ニ腰カケテ居タリケルカ池田ヲ見テ。ソコヲ御通リ候ハ池田殿カ。重手ヲ負テ退事ナラズ候。助テ賜ンヤト詞ヲカクル。池田心得タリトテ。我馬ニ抱ノセ馬ノ口ヲ取テ引退ク處ニ。敵三人追カケタリ。池田蹈留テ一人ヲ撞斃シ。二人ヲ追拂フ。其後付慕者モナクテ本陣ニ歸ル。此士武名アルニ由テ。後黒田甲斐守長政ニ仕ヘヌ。長政件ノ事ヲ聞テ大ニ感稱ス。長政一日廣高ヲ訪テ。及閑話。池田ヲ呼出シ。カヤウニ強キハ

タラキヲシタル人ナリ。御存カト問ル、ニ。廣高拔群ノ戰功ヲモ。常ニ自衒フ事ヲ不レ仕者ユヘ不レ承候。ヨクコソ語リ出サレタレトテ。悅バレケルニ。池田仰ニ就テ耻入候。其時助ンヤ否ヤト申ス聲ヲ聞テ。コハ難儀ナル事カナトマヅ驚キ候。敵ハ跡ヲ慕ヒ。身方ハ續カズ。捨殺シタリトモ。知人ハアルマシ。聞ヌ體ニテ打過ントハ存ナガラ。我コソ後殿ト思ヘ。萬一我ヨリアトニ殘リタル士アリテ此者ヲ助タラバ。二タビ男ハ立ラレマジト思返シ。是非ナク助ケ申候ト云。長政蓋藏(オホヒカクス)ナキ心中百人ノ首ヲ斬ヨリ卻テ難シト讃美セラル。池田次ノ間ヘ出タリケレバ。人々餘リアリノマ、ナル返答カナ。其時ノ貴殿ノ胸中誰カ知人ノ候ベキヤト云フ。池田我若キ時ヨリ一ノタシナミノ候。假初ニモ表裏ナル言行アルマジキト

ノ念願タルニ由テ口ニ虛ヲ不言。身ニ僞リヲ不行候。只今兩將ノ御前ニテ。少モ欺申サバ心ニ耻ル處ニ候ト云。其高義正操世人ノ所不及也。池田常ニ隣家ニ行ニモ。鎖具足ト二三日ノ粮トヲ。挾箱ニ入テ持セタリ。夜臥時ハ上ヨリ糸ヲサゲ鎗ヲ其糸ニ懸テ枕邊ニヲク。取テ出ルニ及デハ。糸斷テサハリナキガ爲ナリ。凡平生ノ覺悟皆此類ノ知シ。

池田市郎兵數有戰功。至爲其所得者。設道場以薦福。已而喪祿落魄貧甚。寺澤廣高徵之。賜以一村租入四百石。特除徭役。曰。聊充朝夕之費。又以卒二十人屬焉。曰以供使令。黑田長政細川○○。皆欲祿市兵。求之未

使百歲之下見市兵敦朴無矯飾之風

得也。聞其已就仕。深以爲恨。密使人以三千石招之。市兵曰。吾以我君之惠。幸得免於饑寒。若以獲祿之厚更應他邦之聘。非義也。不就。廣高聞之曰。池田義不受他邦之重聘。以服事於我。我獨得漠然于懷乎。於是更賜秩三千石。市兵曰。臣之所以委質奉承左右。特以感殊遇而已。寧復問秩祿多寡哉。若以秩祿不副臣意。雖饑餓而死。初不奉命也。且臣策名以來。未嘗有展微勞。而恩禮優渥。已無所報塞。若復叨重祿。臣不樂焉。抑臣亦嘗從軍。得自効於行間。君今以平野源右爲長臣。賜秩八千石。然源右未能與臣言戰。故君欲必益臣秩。令與

前功相稱。雖忝萬石。臣意未以爲慊也。臣既得覆翼。妻孥之奉無欠。於臣優矣。不復願其餘。若少有所增益。秖玷臣前功也。遂辭不受。初市兵從軍。戰敗而殿。其友方被重創。踞于隴。見市兵過。呼曰。請輔我。市兵曰。諾。亟下馬擁其友上。已牽馬將行。追兵適至。市兵擊斃一人。走二人。遂得與俱免。其友亦以材武聞。後得仕黑田長政。具爲長政言狀。長政由是益多市兵勇。頃之。長政過廣高。召見市兵。語次及之。因謂廣高曰。君亦知有此事乎。廣高曰。彼平生不肯以功伐自衒鬻。僕安得知之。相與嘆賞久之。市兵曰。君之言及于此。臣實有慙焉。方臣友之呼救也。臣脫逃最在後。我軍已遠。而敵追益急。臣窮蹙。意欲棄之去。既而以爲。或有後臣退者。爲扶之。臣何面目復視息於人間。故臣之救臣友。實出於不得已也。長政歎曰。吁卿之無庾。一至于此。人所難能。愈於臨陣獲百級遠矣。市兵已退。其友皆曰。甚矣吾子之贛也。誰復知子心所思者。何遽發露爲。市兵曰。否吾少誓無不言與行相掩。今在二公前。苟有欺罔。我所不爲也。平居警備甚至。雖過隣家。猶具鎖衣。齎數日粮。夜寢必以絲繫槍于枕傍。取其易斷也。

三四　板倉勝重之臣松平太郎作諫言之事

板倉伊賀守勝重ハ京都ノ諸司代タリ其近待ノ者松平太郎作ヨク諫ム勝重カ彼カ律義ナル事ヲ知テ信用セラル一年賄方ノ人フチ方升ヲ小ニス太郎作諫ント思テ勝重ノ前ニ出ル勝重何ゾメズラシキ事ハナキカト詞ヲカケラル、ニ此比狂歌ヲヨメル者アリト申ス勝重ソレハ汝ガ作意カ太郎作臣文盲ナリ何トシテヨミ可申ヤ

ホソキ物戀ノ心ニ琴ノ糸三郎カ脚扶持方ノ升

ト世上者ガヨミタル狂歌ニ候ト云其比三郎トテ脚痩テ細キヲノコアレバナリ勝重悟之テ其升ヲ改メサセラレヌ太郎作カ諫皆此ニ類ス

板倉勝重爲京尹近臣有松平太郎作爲人質直善諫

敍述有致

甚爲勝重所信愛會廩人頒糧以小斗太郎作欲諫入見勝重曰卿頃無有異聞乎對曰有適得諧謔之歌勝重曰此豈卿所爲乎曰臣不學安能爲歌得之他人耳因爲勝重誦之曰靜女傷春心至細孰與耦琴絃三郎脛又有送糧斗時三郎者瘦削脛甚小故併及之勝重聞歌悟遽命廩人大斗太郎作譎諫率此類

三五　源君食麥飯行儉約事

源君於參河毎歳夏中ハ麥飯タリ近待ノ人潛ニ白米ノ飯ヲ椀ノ底ニ入上ニ麥飯少許ヲ蓋テ出シケレハ源君御覽アリテ汝等予心ヲ不曉以予吝ルト思ヘルカ今戰國ノ時ニテ兵役動ヌ年ナシ士卒煩擾ニシテ寢食ヲ安

眞字蓋原左傳眞壁

セス。予獨何ソ飽足ニ忍ンヤ。且我一身ノ奉養ヲ儉約シテ。以テ軍用ニ給セントス。百姓ヲ勞シテ自ラ豐ナル事ヲセシト仰セラレケレバ。聞者皆悅服セリ。

東照公在參河。每夏月食麥。左右或眞稻以進。公不悅。曰。汝等豈以我爲愛乎。方今兵興率無虛歲。士皆東西奔走。不暇追食。吾獨忍躬安飽哉。且吾欲嘗貨財以給軍須。苟攘於百姓縱口復之欲。非我志也。聞者莫不感歎。

三六　源君病癰依本多重次之諫而愈事

源君ノ背ニ癰發ス。蛤ノ貝ヲ以テ挾テ血ヲシボリ出サセ玉ヘルニ由テ。是ヲトガメテ。大ニ腫痛テ療治驗ナシ。時ニ明醫ニ上手アリ。諸臣是ニ見セント申セドモ。我死ストモ何ゾ異域ノ醫ニ逢ンヤトテ。御承引ナシ。本多作左衞門重次ノ曰ク。殿今臣ヲ棄サセラル、ヤ。源君ノ曰何ノ言ゾ。重次殿モシ此癰不愈時ハ。臣ハ瞎目跛足誰カ臣ガ如キ者ニ懸命ノ地ヲ與ヘ候ハンヤ。サスガ路頭ニ食ヲ乞ニハ不忍シテ。只自害ヲ致サンノミ。殿御覽セラレズヤ。武田亡テ甲信ノ士ヲ召出サレケルニ。武功拔群ナルモ皆臣等カ末坐ニ就テ臣等ヲ敬ス。殿臣等ヲ愍マセタマハヾ。明醫ヲ忌セラルヘキ理ナシト申セバ。源君御承引アリテ癰ホドナク愈タリ。景勝家志アル士源君癰ヲ病テ不可愈ト聞テ。信玄謙信兩大將卒シテ後ハ。獨家康ノミ武將ノ器量アリ。此人サヘ無クバ天下ノ弓矢ハ廢レントテ歎キアヘリ。源君傳聞タマヒテ。謙信ハ信

玄ノ死ヲ惜メリ。其遺風今ニアリト深ク感ジマシ〳〵ケリ。

此編與常山紀談所載稍有詳略吾兄兩記之皆極遒婉

東照公背上生癰。令左右以蛤殼夾取瘀血。遂高腫發痛。醫無能治。適有良醫至自明者。群臣請令爲治。公曰。吾寧死豈從異邦小豎求治哉。不聽。本多重次進曰。君何忍於棄臣也。公曰。何重次曰。君疾若有不可諱。如臣眇且跛。誰復瞻以朝夕之費者。臣已不能乞食道路。獨有刲復死而已。且往歲甲之亡。君收其遺臣祿之。雖素積偉功者。皆莫不曲拳跪擎。以立臣輩下風。君所知也。故君若有思於群臣。何必屏殊方之醫爲。公曰。善命醫治。疾尋愈。上杉景勝臣。或聞公疾病。相謂曰。自甲機山與我先君卽世。天下獨有德川某耳。斯人而亡。良將之略其廢乎。公聞之曰。吾聞謙信方食聞信玄死。投箸興歎。今尙有此遺風也。嗟歎久之。

三七　源君使斥候見敵地事

何レノ處ノ戰ニカ。源君敵地ニ入テ。斥候ヲ遣シテ地形ヲ見セシメ玉フニ。右ノ方ニ深田アリ。馬ノ足モ不立。歸テ此由ヲ白ス。源君陣々ニ令スルトモ而モ。其所身方ノカ、リ口便リヨケレバ。戰亂ニ臨ミテハ。誰モ我ヲ忘レテ。馬ヲ馳入討ル、者有ベシトノ御思慮ニヤ。折フシ夏ノ初ニテ白キ袷ヲ著ナガラ。斥候ノ士ヲ召具セラレ。深

田ハイヅヨヅ。此ニテ候ト申ス詞ノ下ヨリ。其深田ニ倒入テ腰ノ上マデ泥淖ニ沒シ玉ヘバ。扈從ノ人々驚キ走リ寄テ引上ゲ奉ル。陣中カクト云傳テ。諸手暫時ガ間ニ知之。合戰ノ時ニ至テ士卒皆自戒テ深田ノ近邊ニモヨラズ。聞テ恐レサルモ。見テ懲ル習ヲ思召ケル物ナラン。

此卷前半所載諸篇率皆咨咨細細而語極淘洗譬如畫家白描小景後生學之方有進長處

東照公嘗使人視戰地。還報曰。路傍有淖。深至沒馬。公以其他便於進戰。事急必有陷淖者。因從其人。親往驗視。時方夏初公著素綿袷衣。問淖何在。舉手答曰。淖在此。語未畢。公遽陷淖沒帶。左右驚。急掀公出于淖。已而軍中相傳。須臾皆遍。是以及戰。無一陷淖者。公意蓋喻之以言。不如以躬爲戒之愈也。

三八　內藤正成守濱松城事

源君遠州二俣ノ城ヲ攻玉フニ。一陣本多平八郎忠勝。二陣榊原小平太康政。三陣本多作左衞門重次。四陣犬須賀五郎左衞門康高ナリ。時ニ內藤四郎左衞門正成誤テ足ヲ折損シテ不能從師。留テ濱松ノ城ヲ守ル。源君二俣ノ地ヲ侵テ夜戰ス。俄ニ甚雨疾風ニ遭テ。進退分合自由ナラザレバ。輕ク濱松ニ引取玉フ時ニ。忠勝人ヲ馳テ。源君只今御歸ナリ門ヲ開レヨトイヘドモ。正成令シテ固鎖テ不開。忠勝自至テ門ヲ叩キ聲々ニヨベドモ。正成門櫓ニ上リ。何者ゾソヨ卻。不卻ハ打殺セトテ。鐵砲ニ火繩ヲ挾セテ下知シケル間。後軍支テ不進得。忠勝此由ヲ人ヲ以テ旗本ニ告タリケレバ。源君一騎門際ニ乘來リ給ヒテ。四郎左衞門ハアルカ。我今歸リタリト仰ラル。正成御

詞ヲ聞。狹間ヨリ挑燈ヲ縋テ。慥ニヨク見定メテ後。門樓ヨリ急ギ下リテ。自門ヲ開キ。出迎テ入タテマツル。源君正成ナシテ城ヲ守シメバ。敵ニ謀將アリトモ。不可敢干トテ。再三稱譽シタマヘリ。

東照公攻二伊。內藤正成傷足不能從。留守濱松。公入二伊戰。會日暮風雨暴至。引歸。本多忠勝在前列。使人馳告正成開門。正成不應。鎖門益固。忠勝至自敲扉。且呼者數聲。正成在樓上曰。咄。誰敢爾者。不速退擊殺汝。督其兵將發銃。已而衆繼至者重沓。忠勝不知所爲。使還報狀。公卽單騎馳踵門。呼曰。四郎安在。吾今至矣。正成乃自銃眼縋燭下照。而後下開門以迎。公嘆曰。使四郎守城。敵雖有奇計。豈得犯乎。

三九　源君巡見大坂之攻口事

大阪陣ノ時。源君諸牧ヲ勞ヒ。攻口々々ヲ御巡見アリ。本多佐渡守正信。同上野助正純。成瀨隼人正政成等從ヘリ。アル陣所ニ至ル時。鉛子ノ來ル事荐也。佐渡守此所ハ鐵砲キビシク候ト申セドモ。猶外ニ出給ヒテ。御返答モナシ。初鹿傳右衞門。横田甚右衞門モ御供ナリシガ。二人相共ニ。此殿ハ元來鐵砲ノサキヲ好マセ玉フト見エタリ。此ヨリモ船場ノ陣ニハ。大筒ヲ揃ヘテ放カクル處ナリ。イザ御供申サン可然トテ。御馬ノ口ヲ牽向ケレバ。源君卽船場ノ陣ニ赴キ給フ。是ハ阿波ノ手ノ役所ニテ。城ヨリ遠ケレバ。鉛子ノ稀ニ來ル所ナリ。源君初鹿横田ガ勇

士ノ法ヲ知タル事ヲ感ジオボシタル御氣色ナリ。二士ノ慮尤善シ。

大坂之役。東照公巡軍。本多正信父子。及成瀨政成等從。公方在軍前。城上銃丸雨下。正信曰。銃丸下甚多。公仍駐馬。屹立略如無聞者。初鹿傳右横田甚右侍。曰。我公素喜冒矢石。如船場軍。城上連發巨煩。公盍一往觀之。急牽公馬。轉至船場。則阿波營在焉。距城已遠。銃丸至者甚少。公意頗喜。初鹿等臨陣善於勤勉也。

四〇　極暑疲馬不可飼水事

瀧川左近將監一益。武藏野合戰ニ擊負テ退口ニ。極暑ノ比ナレバ。馬甚疲レテ遍身汗ニヒタレリ。川ヲ乘渡ス時水ヲ飼者アリ。不飼者アリ。水ヲ飼者ノ馬ハ。十町バカリニテ皆行仆レタレドモ不飼者ノ馬ハ別事ナカリシト云ヘリ。

瀧川一益戰于武藏野。敗走。屬天熱。馬皆疲極。汗流浹體。方涉水。或有飲馬者。行數百步皆斃。其不飲者則否。

四一　源君使景勝援佐竹義宣事

大阪ノ役ニ。源君上杉景勝ヲシテ。佐竹義宣ヲ援ハシム。景勝其臣杉原常陸ニ令ス。杉原相圖ヲ定メテノリ出シタリ。義宣追立ラル、處ニ。杉原堤ノ上ニ馬ヲ乘上。輪ヲ三返カケタリ。景勝見之テ。總軍一同ニ横ニ擊テ利ヲ得タリ。堤ノアナタヲ心モトナク思ヒ。大軍進テ可ナル時ハ。輪ヲカケント約セシ故也。是ヲ相圖ノ物見ト云。其品

ハ約ニ由テ。イカヤフニモアルベシ。

大坂之役。佐竹義宣與城兵戰。東照公使上杉景勝援之。景勝遣其臣杉原常陸視戰。常陸馳至堤上。見義宣爲城兵所擊却。因盤馬者三。景勝卽悉兵。橫擊城兵。大敗之。蓋景勝豫與常陸約。以盤馬爲號。軍中因事爲號。固非一端也。

此下六篇畧出諜者逐次選定皆雜隨意至譬如蓄水園池洲沙灣碕無不隨處深洞

四二　橫田甚五郎之相圖物見之事

大須賀五郎左衞門尉康政。遠州橫須賀ノ城ヲ守ル。勝賴其地ヲフミユヘテ。高天神ニ壘ヲ構テ置。戍兵。橫須賀ト其間遠カラズ。勝賴ノ兵橫須賀ノ地ニハタラキ入テ。五十騎計ニテ引取時。橫須賀ヨリ百五十計出タレドモ。跡ヲ不付勝賴ノ兵笑テ。懦弱ナリト思テ。皆追ナラサントス云。橫田甚五郎。是敵伏兵ヲ置テ待者ナラン。其地ヲ直ニ行ケバ一里也。マハレバ三里ナリ。我先窺ハン。スグニ乘通ラバ。伏兵アリト知テ三里マハレヨトイヘバ。皆實ニ伏兵アラバ。貴殿危カラズヤト云。橫田五十騎ヲ討ン爲ニ。設タル伏兵ヲ我一人ニ起スベカラズ。其間ニハ乘通ルニ。別儀アラストテ。ノリ出ケルガ。スグニ乘通リタリ。衆皆三里ヲマハル。是モ相圖ノ物見ナリ。

大須賀康政守橫須賀。武田勝賴。遣兵過橫須賀。築砦於高天神置戍焉。已而戍兵五十人。出鈔橫須賀。將歸。康政出百五十人要之。未敢進戰也。甲人以爲怯。欲驅略而去。橫田甚五郎曰。是設伏以誘我也。徑行不過十

里。他路則三十里矣。吾請往諜。若有伏當直馳去。公等乃取他路而歸。皆曰。公獨得無危乎。横田曰。敵設伏欲以覆我衆。豈爲一人發乎。比其發也。吾亦疾馳而去。何憂於不得脫也。遂往。衆見其直馳去。皆取他路而歸。是亦豫爲號以諜也。

四三　可用斥候之功者事

大阪ノ役ニ。松平上總助忠輝陣ヲ取タル處ニ。敵又大軍ニテ來テ陣ヲトル。忠輝欲戰。アル人諫テ曰。我客兵ニテ未地形ヲ不諳。且ツ敵ノ師幾ト云事ヲ知カタシ。粗忽ノ戰ハ不可ナリ。諸部能ク謀ヲ合セテ。不危シテ勝ニ不如ト。忠輝從之。其夜ノ内ニ敵引取テ。忠輝手ヲ空フス。是敵ノ陣ヲ取シクト。早引退トノ形ヲ不辨ニ依テナリ。常ニ斥候ノ功者ヲ用ユヘシ。

大坂之役。公子忠輝已下營。少頃。城兵亦大至。壓之營焉。公子欲戰。或曰。我爲客。未得形便。又不知敵衆寡。不如與諸將議然後戰。公子從之。至夜。城兵遽拔營而去。公子不得復戰。蓋無能察城兵久留與否。是諜所以擇乎習戰者也。

四四　物見使番察將士之心不可言實事

大阪ノ役ニ。源君本多出雲守忠朝ヲシテ。河水ノ增ヤ否ヲ見セシム。歸テ曰水勢夥シ。渡ルヘカラス。源君汝ハ父ノ子ニ非ス。水勢ノ夥キハ。女童モ見テ知之。汝カ目ヲカ

ランヤ。我不レ見シテモ料ニ知之。汝ヲヤルニ心アリ。不レ曉之ハ愚ナリト仰ラル。物見使番主將ノ心ヲ察シ。士卒ノ氣ヲ測テ。實ヲ言サル事アリ。

大坂之役。東照公使ニ本多忠朝。視ニ河水漲否。還報曰。河水漲甚。不レ可レ涉也。公曰。河水之漲。婦孺猶知レ之。復詎須ニ於汝。我之所ニ以遣レ汝豈爲ニ此哉。是之不レ悟遂於乃父遠矣。意甚不レ樂。故諜者務在ニ揣元帥意。隨レ時制レ宜。未レ得ニ直據レ所レ見以爲レ報也。

四五　源君使渡邊圖書見加州之陣場事

大阪ノ役ニ。源君渡邊圖書ニ。加州ノ陣場ヲ見テ參レトテ御使ニ遣サル。渡邊竹束竹一本拔テ。三尺二寸五分ニ切。隍際マテノ間ヲ打テ。委細ニ言上ス。城ヨリ矢玉ヲ飛スレトモ不レ中。後ニ源君與ニ力丗騎。同心百人ヲ預ケ玉ヘリ。

大坂之役。東照公使ニ渡邊圖書視ニ加賀戰地。渡邊就レ軍前排ニ束竹者一竿。斷レ之三尺二寸五分。以レ度地直至壕而止。城上飛丸兩下不レ中。已還具以レ狀聞。公壯レ之後使レ將ニ騎三十卒百人。

四六　伊達正宗使ニ茂庭周防出ニ物見事

伊達正宗。奥州ニテ敵ト相戰フ時。家臣茂庭周防物見ニ出テ。塚ノ上ニ馬ヲ乘アクル時。伏兵俄ニ出テ周防ヲ擊取タリ。引カハ引ヘケレトモ。不レ引ハ周防カ勇也ト譽レ之

者アリ。アル人聞之デ。物見ニ出タル者。敵ヲ見テ引取ルハ本ヨリ恇トセス。物見ハ軍ノ勝負ニカヽル大役ナレハ也。伊達家此法ナキニヤ。周防ホトノ者。伏兵アルヤ否ヤノ形ヲ察ルノ道ヲ不解。君臣共ニ失也ト云ヘリ。

伊達正宗臣茂庭周防爲候騎。直馳登小阜。遇伏而沒。或以爲。周防非不能脫身逃走。其死之者勇也。殊不知。斥候者戰之勝敗係焉。不以逃走爲耻也。正宗行軍。已無是法。以周防之材。又不能豫度有伏否。而後進。遂陷于死亡。蓋胥失之矣。

四七　三人之武功其賞勝劣事

大阪陣ノ時。東師ノ將誰ト云事ヲ不知。其從士三人進退ノ足場ヲ見ニ出ル。流水人ノ腰ニ及ホトノ小川アリ。向ノ岸ニ石佛アリ。城兵モ三人初ヨリ川端ニ出テ居タリ。東兵三人ノ中。二人ハ鎗一人ハ鐵炮ヲ持タリシカ。城兵鐵炮ヲ恐ル、ト見ヘテ。石佛ヲ楯ニ取テ其陰ニ伏ス。鐵炮ヲ持タル者川上ニ上リ。横筋違ニ放ナカクレトモ。間遠ニヨリテ不中。於是鐵炮ヲヤメ。刀ヲ拔テ川ニ颯ト打入時。二人ノ者直涉シテ城兵ト鎗ヲ合ス。總軍見之テ味方討スナトテ競カヽル。城兵由此引退ク處ヲ。二人追之トモ不及終ニ追捨テ歸ル。鐵炮ヲ持タル者ハ。一番ニ川ヲ渡ストイヘトモ。敵ト間遠キユヘニ鎗ヲ不合。大阪沒落ノ後。三人ノ武功ヲ賞シテ。鐵炮ヲ持タル者ニハ五百石。鎗ヲ合セタル者ニハ三百石ノ加增ヲ與。二人臣等ハ已ニ鎗ヲ合セタル事隱ナシ。勝負ヲ付サル事ハ總軍ノ

競ヒカヽルヲ見テ。城兵早ク引退シニ由テ也。何ソヤ彼者川上ヨリ遠々ト。危ケモナク放ナタルバカリニテ鎗ヲモ合セサルニ。加祿ノ差別アル事心得カタシトイヘハ。其主人石佛ノ陰ニ伏タルハ。鐵炮ヲ恐テナリ。川上ニ上リ鐵炮ヲ放ナタルマテハ。二人川ヲ渉ル事ナシ。鐵炮ヲ放ナ聲ヲ揚テ。一番ニ川上ヨリ渉セシ詞ノ再拜ヲ後楯ニシテ。川ヲ渉セシハ彼者ノ下知ニ付タルニ非スヤ。川上ヨリ渉セシユヘ。間遠ニテ其内ニ敵引退ケハ。太刀打ニモ不及也。又總軍競ヒカヽラスハ。二人モ勝負ノ驗アルヘシ。彼者モ及ヲ接サランヤ。彼者川上ニ上リ。鐵炮ヲ放テ敵ノカサヲトリ。一番ニ川水ニ打入テ渉ルハ。武功ノハタハリアリ。武功ハ强ノ味ヲ專トスル者也。二人ノ訴僻事ト謂ヘシ。二人ノ働モ勝レサルニハ非ス。堪忍スルニ於テハ。滿悅タルヘシトテ。右ノ次第ヲ書付テ見セラレ。三人共ニ酒飯ヲ玉ハリ。其上ニ各陣羽織ヲ與テ慰勞セラル。

極細屑而絶無滲漏巧々

大坂之役。有東兵出河上視戰地。其一携銃。餘二人携槍。適城兵三人亦先在前岸。見東兵携銃。皆隱石佛陰。携銃者沿水行數十步而發。不中。遽擲銃於地。拔刀赴水。於是。二人亦亂流而渉。先得達岸。與城兵鬪。携銃者未至。屬衆齊進救之。城兵逃走。追之。不及而止。反自役。其君賞之。加賜携銃者秩五百石。餘三百石。皆不悅曰。臣等與敵兵搏戰。人所知也。其不能有獲者。以吾衆齊

進敵兵懼而逃也若夫彼則遠在上流隔水發銃未嘗冒危險而秩祿反在臣等上者何也君曰敵兵隱石佛陰者畏彼携銃也彼初沿水行而發銃方是時汝等未有涉水意及彼擲銃一呼赴水乃敢絕流進鬪是非爲之從乎彼遠涉自上流是以不及戰然當時若無吾衆齊進敵兵未遽走去汝等或能獲之顧彼亦未必不進接刃也夫戰在乘勢彼沿水行發銃已足懼敵而張我武又擲銃先赴水其爲烈莫以尙焉二人之言固繆矣然二人亦建奇功若能和協無爭亦吾所嘉尙也書以視之且召三人賜以酒饌慰撫甚至并賜戰袍各一

四八　源君進茶於秀吉事

秀吉於伏見源君利家氏鄕ヲ享セラル此ヨリ聚樂ニ往テ共ニ遨遊シ歸路ニ德川殿ノ所ニ立ヨルヘシトノ事ナレハ源君忝シトテ宅ニ歸リ聚樂ニテ美食ノ上ナレハ唯茶ヲ奉ルヘシト云テ堂ヲ拂ヒ庭ニ洒キ自壺ノ口ヲ切茶一袋ヲ茶道朱齋ニ令シテ挽シム明日源君聚樂ノ坐ヲ早ク立テ歸リ玉ヒテ茶ヲ御覽ズルニ減少ナリ朱齋ヲ召テ大ニ怒リ責サセラル、朱齋水野監物是ヲタヘ候ヌ上ノ御茶也ト制シ候ヒツレ共聞入候ハスト申監物ハ御寵愛ノ美童ナリ又新ニ壺ノ口ヲ切テ別ニ一袋ヲ取出シ茶道休閑ニ挽シム加々爪隼人上ハ早御成ト申ス唯今挽候ヒテハ遲々仕ルベシ初ノ御茶減少ナリトモ侑メ奉ルホドハ有ベシト申セバ源君ヤ、隼

人。汝ハ近習ニテ予ガ口眞僞ヲモスル者ノ。カヤウノ心得ナキカ。縱ヒ茶挽イタサズシテ。太閤徒ニ皈ラセラレテ。無興ニナルトモ。已ニ人ノ飲タル餘リヲ。侑ル道ヤアル。其志ナラバ。汝ガ奉公正シカラシト。戒サセ玉ヘリ。源君ノ律義ナル事此類ナリ。

豐太閤在伏見。享東照公及前田利家蒲生氏鄕。酒酣。太閤曰。且與公等趨聚樂。游燕盡歡。歸塗更過內府。如何。東照公頓首謝曰。幸甚。公念太閤飲宴連日夜。殽饌豐盛。比其至。獨有進茶以佐歡而已。急歸邸。發茶壺。取一袋。令茶博士朱齋碾之。且命洒掃以待賓。已而至。聚樂。明日先歸視茶。惟其少。召朱齋詰之。曰。水野監物就臣求茶。臣以公上所須。固執勿與。不聽。强奪啜之。所以減舊也。監物方以容色爲公所愛幸。公更發壺出一袋。令休閑碾之。加々爪隼人曰。太閤駕且至矣。今而碾茶恐無及矣。往所餘雖少不足以爲供乎。公怫然不悅曰。汝久事我。寧不識吾平生者。猶爲此言乎。今碾茶或不及爲供。太閤徒歸亦已矣。吾豈得以小豎歡殘之餘供貴賓。汝設心如此。吾知汝嘗昔事我未必出於正也。公臨事謹嚴率此類。

四九　源君不飾厩事

源君藤森ノ屋敷ノ厩。破損ニ及ビケレバ。加々爪隼人新

造セントス。源君雨モラバ。其所バカリ葺カヘヨ。壁崩ハ其ヒマバカリニ土ツケヨ。此外ハ略セヨト仰ラル。隼人今上方ノ諸大名。夏ハ蚊帳ヲツリ。冬ハ蒲團ヲ著セテ。馬ヲ愛セラル、事大形ナラズ候。君ノ御厩ニハ。戸口ニワラムシロヲ掛。常ニ糂(カレイツ)ヲ飼セラル。是ハ餘リ糅相ニ候トモ申ス。源君武士ノ馬ヲ養ハ。用ニ立處ヲ專ニシテ。外見ヲ飾ラズ。予ガワラムシロヲ掛。糂ヲ飼フ馬ト。他家ノ蚊帳ヲツリ。フトンヲキスル馬ト。事ノ變アル時ニ。何レガヨク險山ヲ登リ。激川ヲ渡リ。堀切ヲ飛踰深田ヲ躍出。極寒酷暑ヲ凌ン。汝必ズ厩ヲ造リ馬ヲ養ニ。上方風ヲ效サレト。堅ク制シ玉ヘリ。

東照公藤森邸厩壞。加々爪隼人請新之。公曰。屋之穿者葺之。壁之毀者塈之。餘且仍舊已矣。隼人曰。方今上國諸侯蓄馬。夏則幬之。冬則衾之。愛養亦至矣。獨君之厩。以藁席塞戸。朝夕不過以米泔水飲馬而已。比之他侯伯。豈不太相遠乎。公曰。士之蓄馬。要取適用而已。豈徒爲觀美哉。吾之厩固以藁席塞戸。朝夕飲馬亦不適米泔水。然一旦緩急。其能騰塹徑淖。度峻嶮而不傷寒暑者。未知與他侯伯馬孰愈也。汝蓄馬愼勿倣上國諸侯之爲可矣。

五〇　堀久太郎秀政旅宿失火之事

堀久太郎秀政旅行ノ時。止宿セラレタル夜。村邑ニ失火

アリ。卽人多馳集リテ。シトメタリ。秀政其所ノ頭人ヲ呼ヨセ人ヲ改メ。一物モ掠取サル證ヲ見セテ。還サレケレバ其所ノ商賈大ニ感之。其後上總介忠輝卿ノ旅宿ニ失火アリ。消トメケル事ハ。秀政ニ同ジケレドモ。人ヲ改メラレズ。是ヲ以テ忠輝卿ハ秀政ニ似ヌ人ナリ。火ヲバケザレタレドモ。雜人共ノ盜ニアヘリ。貨財ヲ失ヒタル事。火ト盜ト名ハ異ニシテ。實ハ同ジトソ毀リケル。アナガチ貨財ヲ掠取タルニモアラネド。作法正カラザルニ由テ。一物ヲ失ヒタル者ハ。十百ノ如ク云ナシテ。人口ノ毀リヲ免レズ。

堀秀政嘗客行。舍于一邑。邑中夜失火。衆與撲滅之。將散。秀政召邑吏。命每人搜檢證無抄一物。而後遣之。上總介忠輝。亦嘗在逆旅遇火。財賄多喪。蓋以不搜檢故也。夫燬于火與盜。其亡財一也。且非必由盜竊之爲。特以措置不得。一有所亡失。衆相傳若多亡財者。是以知秀政加于人遠矣。

五一　秀忠公教訓御近習之事

秀忠公御近習ノ人ヲ召テ。事ノ次デニ。道理諭キ者多ハ道理ヲ盡サズ。是其才智ニ馳テ。事ノ根源ヲヨク不察ノ誤ナリ。是ヨリ外ハアルベカラズト思フ事ヲモ。人ニ問ヒ自省時ハ。此ノ碍彼ノ患アリ。汝等常ニ此理ヲ思ハヾ。事ヲ行ニ過失少カルベシ。武士ノ自決斷シテ人口ヲ不憚ハ各別ノ義ゾト仰セラル。

此與下章雖寥寥短篇皆極難于措辭者乃清爽如此亦不易多得也

台德公嘗謂左右曰。凡機敏過人者。處事多不得於道。是自負其才而圖慮不周之過也。今有一事焉。以吾所見。獨有如此而行。他若無爲者。然審思一番。或謀諸人。往往有牴牾不可行者。汝等能執此心。臨事庶得寡過矣。若夫勇士取決己心。不復恤人言者。要與此別耳。

五二　觀世左近論謠之三病事

觀世左近ハ。謠ニ名ヲ得タル者ナリ。後剃髮シテ。安休ト號ス。謠ニ三病アリ。聲ノヨキト。覺ノツヨキト。拍子ノキヽタルト。此三事備レル者。多分謠ニ不成シテ止ト。人ニ教ヘヌ。是何ノ道ニモアルベキ事ナリ。器用ヲ賴ム者ハ。自滿リトス。自滿リトスル者ハ。工夫ヲ不積。工夫ヲ不積者ハ。諸藝ノ奥意ヲ曉リ難シ。

觀世左近以善謠曲顯於當世。晚削髮號安休。語人曰。學謠曲者有三疾。音制之美也。記性之敏也。節奏之巧也。兼此三者。少能潰於成焉。嗚呼豈獨謠曲而已哉。凡學技藝者皆然。大抵天質過人。其意先自滿。必不肯致力。其望於升堂入室難矣。

五三　寺尾作左衛門大力之事

戸川肥後守安達ガ家臣。寺尾作左衛門ハ其比稀ナル大力也。一年江戸ニ行時。僕ト馬子ト爭論ヲシ出シテ。僕馬子ヲタヽキ倒シケレバ。其驛ノ馬子ドモ百計相聚。棒ヲ振リ礫ヲ飛セテ。寺尾ヲ中ニ取コメテ。怒リ劃ル處ヲ。寺